佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書21集

UZURA O NE

鶉ヲネ

長野県佐久市香坂鶉ヲネ遺跡発掘調査報告書

1988

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例　　言

1　本書は、昭和62年度市道大ごつ線道路改良事業（高速自動車道関連事業）に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　調査委託者　　佐久市建設部

3　調査受託者　　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4　発掘調査所在地　　佐久市大字香坂字鶉ヲネ590、589－1・2・3、591、592、593、599

5　調査期間及び面積　　昭和63年3月3日～3月31日　　1,200㎡

6　調査団の構成

（事務局）

所　　長	西沢正己	調査係主任	高村博文
庶務係主査	畠山俊彦	調　査　係	三石宗一
庶　務　係	田中芳美		小山岳夫

（調査団）

団　　長	黒岩忠男（佐久考古学会副会長）
調査指導者	白倉盛男（佐久考古学会副会長）
調査担当者	林幸彦（佐久市教育委員会）、羽毛田卓也（佐久市教育委員会）
調 査 主 任	佐々木宗昭、翠川泰弘
調査補助員	井出百合子、大井恵美子、堺益子、高杉昌子、橋詰勝子、橋詰信子、三石和子
調査協力者	浅沼ノブ江、市川香里、遠藤しずか、金森治代、木島美子、田中夏江、内藤治伸、並木ことみ、橋詰けさよ、星野良子、細萱ミスズ、山崎平八郎、渡辺久美子

7　本書の編集は、羽毛田・翠川が行い、執筆は、土器が翠川、他を羽毛田が行った。

8　本書及び鶉ヲネ遺跡出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　　例

1　遺構の略称　　Ｊ→縄文時代竪穴住居址　　Ｄ→土坑

2　遺構・遺物の縮尺は原則として次のとおりであり、図中にスケールを付した。

　１）遺構　住居址→１／80　　炉→１／30　　土坑→１／60

　２）遺物　１／６～２／３

3　挿図中におけるスクリーントーンは下記の内容の表現である。

　　地山断面→斜線　　炉→点

4　遺構の海抜標高は、各遺構ごとに統一し、水糸ラインに水糸標高として明記した。

5　重複遺構及び撹乱は、上端のみ実線で表示した。

6　挿図中の略記号は次のとおりである。

　Ｐ→ピット　　Ｓ→石　　土層断面図中のＰ→土器

7　写真図版中の遺物の縮尺は，原則として実測図と呼応する。

8　遺物番号は簡略し、例えば第14図５は14－５とした。

9　写真図版中の遺物番号は、実測図と同じである。

10　各一覧表の数値について、現在値は〈　〉、推定値は（　）とした。

11　本遺跡の遺跡の位置と環境については、1987年刊行の『淡淵・屋敷前・西片ケ上・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅰ』及び1988年刊行の『茂内口遺跡』に記載してあるので、本書では省いた。

12　遺構覆土の色は、農林水産省農林水産技術会議事務所・財団法人日本色彩研究所色表監修1970『新版　標準土色帖』の表示に基づいて示した。

目　次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯　1

第Ⅱ章　基本層序及び概要　3

第Ⅲ章　遺構と遺物　4

1　住居址　4

1）第1号住居址　4

2）第2号住居址　4

3）第3号住居址　16

4）第4号住居址　25

5）第5号住居址　31

2　土坑　34

1）第1号土坑　34

2）第2号土坑　35

3　遺構外及びトレンチ　36

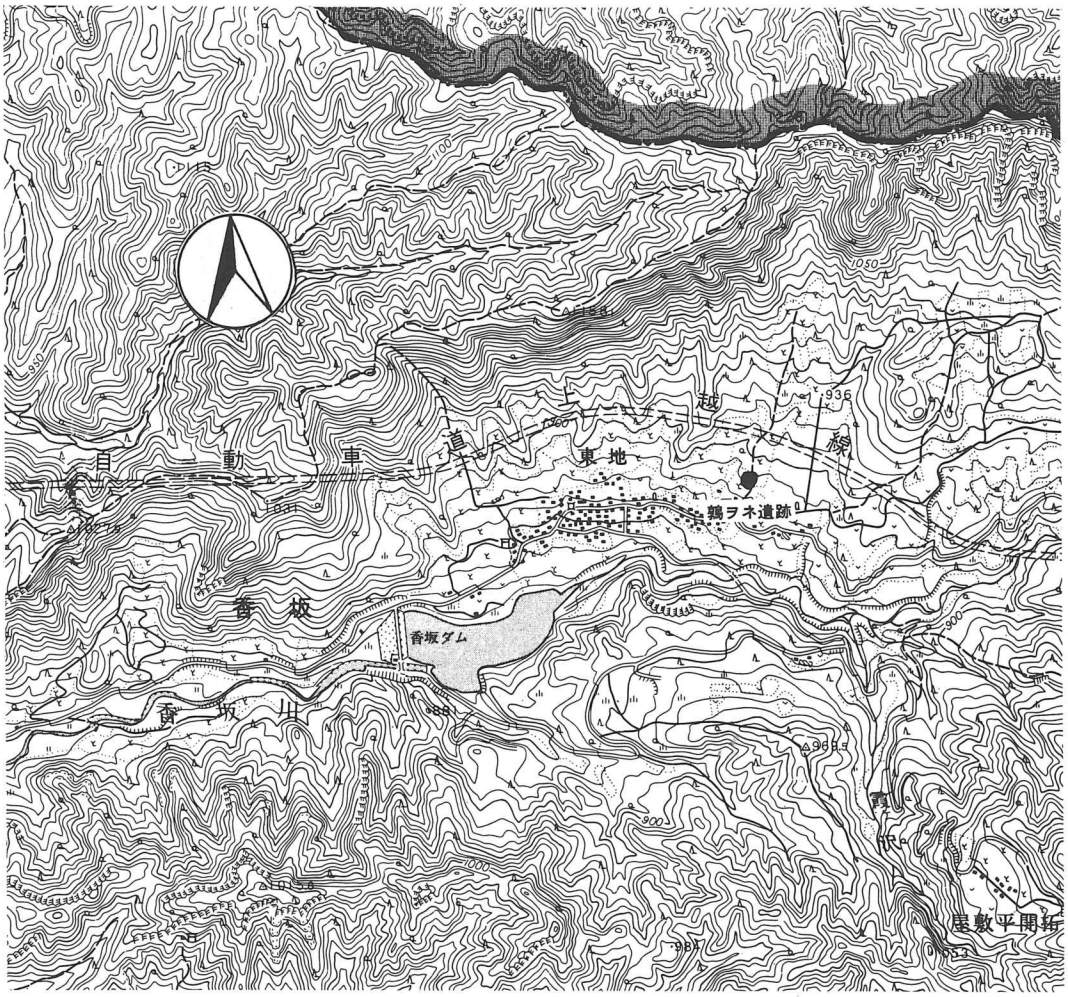
第Ⅳ章　総括　39

写真図版

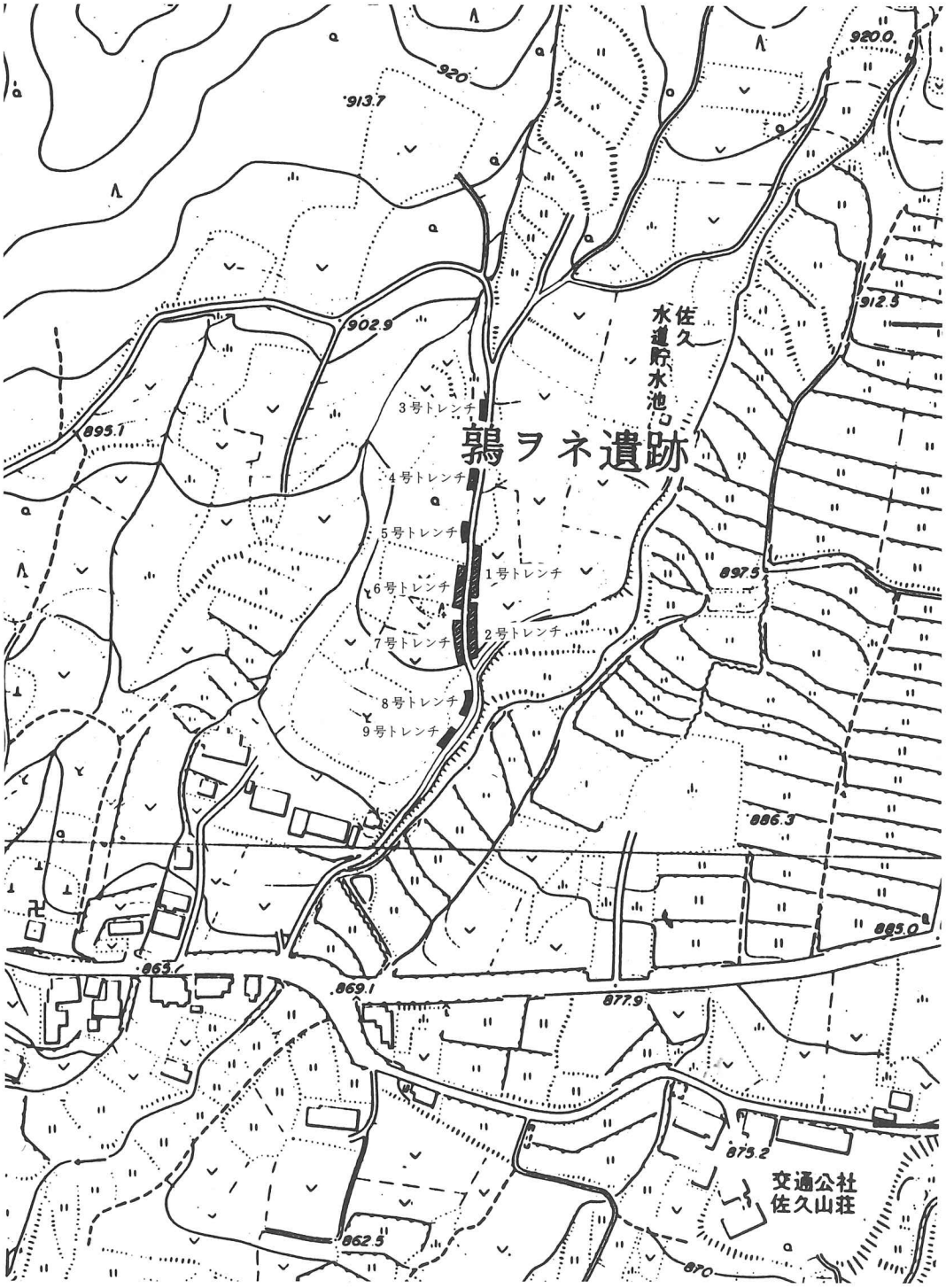
第Ⅰ章　発掘調査の経緯

鶉ヲネ遺跡は、佐久市大字香坂字鶉ヲネに所在する。付近は、険しい八風山系が香坂川に向かってなだらかに傾斜を始める南斜面で、数多くの尾根と微高地を形成する。当然小谷地からは水が涌いている。本遺跡は、こうした尾根上に展開する縄文時代の集落址で、標高は880～900mを測る。

今回、佐久市建設部が行う市道大ごつ線道路改良事業に伴い、同建設部と佐久市教育委員会とで協議の結果、本遺跡の破壊を余儀なくされ、緊急に記録保存する必要が生じた。そこで佐久市建設部より委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが主体となって発掘調査する運びとなった。



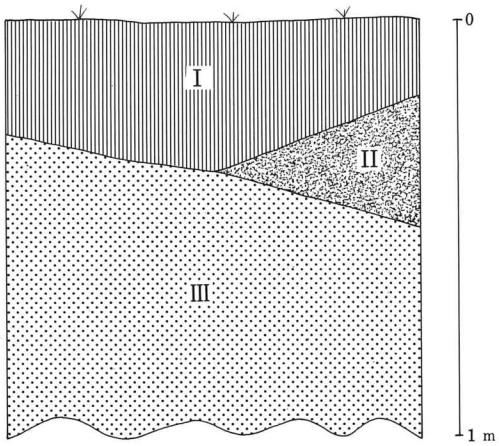
第１図　鶉ヲネ遺跡位置図（１：25,000）



第２図　鶉ヲネ遺跡位置図及びトレンチ設定図（１：2,500）

第II章　基本層序及び概要

1　基本層序



第３図　基本層序模式図

層序は調査区の全域を通して、第３図の模式図のとおりである。第Ｉ層は、耕作及び、森林の影響下で成立した暗褐色土で、第II層は、ローム粒子・パミス中粒以下を少量含む褐色土で、第III層は、パミス中粒以下を少量、スコリアを微量含む明黄褐色ローム層である。なお遺構は、第III層上面において確認された。

2　検出遺構・遺物の概要

1）遺構　　竪穴住居址５棟　　縄文時代中期末葉～後期初頭

土坑　２基　縄文時代後期初頃～近代

2）遺物　　土器　深鉢・浅鉢・注口土器他

石器　打斧・石匙・石鏃・凹石・砥石・スクレパー他

第Ⅲ章　遺構と遺物

1　住居址

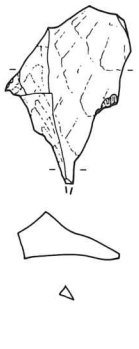
1）第１号住居址

第１号住居址は、調査区のほぼ中央、い・う－４グリッド内において検出され、東側を撹乱に南側を第４号住居址によって破壊される。

平面形態は残存部分が少なく不明である。壁高は残存する北壁で14～17cmを測る。ピットは７個が検出された。P_1は径28×32cm・深さ22cm、P_2は径12×18cm・深さ９cm、P_3は径38cm・深さ50cm、P_4は径21×28cm・深さ14cm、P_5は径28×31cm・深さ35cm、P_6は径30×34cm・深さ23cm、P_7は径33×39cm・深さ51cmを測る。

遺物は、深鉢片と玄武岩の剝片、玄武岩製の石錐が出土している。

本住居址の所産期は、第４号住居址が縄文時代後期初頭に位置付けられるため、また出土した土器片が中期末の様相を示す事より、縄文時代中期後葉と考えられる。

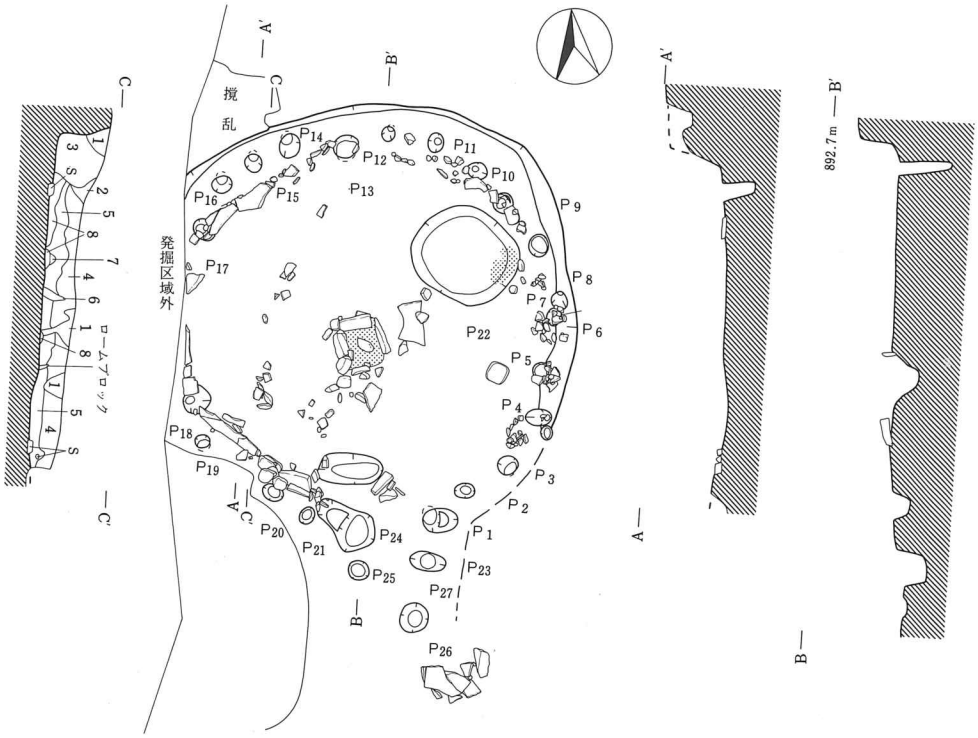


第４図　第１号住居址出土石錐実測図

2）第２号住居址

第２号住居址は、調査区の北側、あ・い－７～９グリット内において検出され、北西壁を撹乱に、南西壁を第２号土坑によって破壊される。

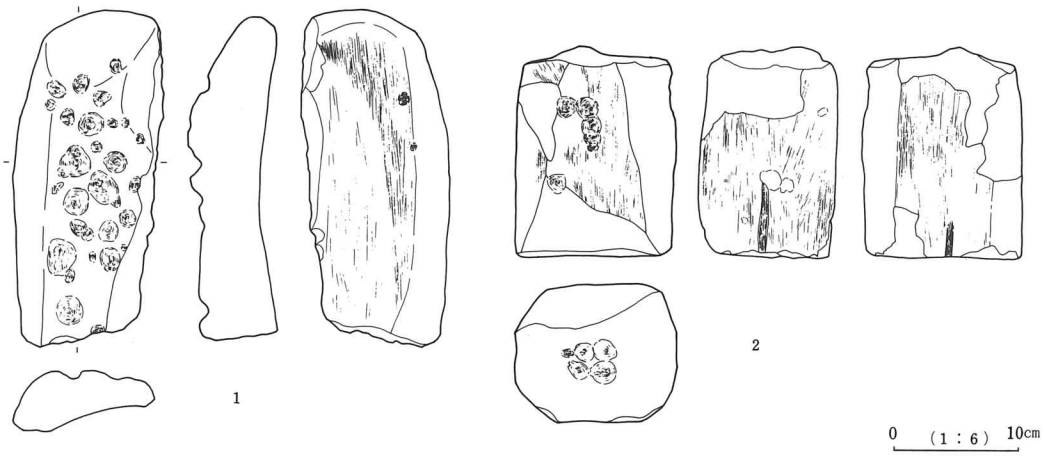
平面形態は円形を呈し、南側に張り出し部を持つ。規模は南北が440cm（張り出し部を含めて580cm）で、東西が推定で456cmを測る。壁高は残存する北壁で38～54.5cm、東壁で11～36cmを測る。ピットは27個が確認された。P_1は径16×24cm・深さ29cm、P_2は径19×22cm・深さ49cm、P_3は径13×15cm・深さ17cm、P_4は径16×27cm・深さ60cm、P_5は径20×24cm・深さ62cm、P_6は径15×18cm・深さ52cm、P_7は径15×18cm・深さ31cm、P_8は径23cm・深さ50cm、P_9は径22×24cm・深さ48cm、P_{10}は径18×21cm・深さ33cm、P_{11}は径17×21cm・深さ55cm、P_{12}は径14×16cm・深さ56cm、P_{13}は径25×28cm・深さ60cm、P_{14}は径22×26cm・深さ50cm、P_{15}は径18×19cm・深さ35cm、P_{16}は径18×21cm・深さ44cm、P_{17}は径20×26cm・深さ59cm、P_{18}は径30×31cm・深さ39cm、P_{19}は径14×15cm・深さ26cm、P_{20}は径16×23cm・深さ34cm、P_{21}は径17×20cm・深さ15cm、P_{22}は径97×109cm・深さ20cm、P_{23}は径26×37cm・深さ39cm、P_{24}は径46×70cm・深さ41cm、P_{25}は径22×23cm・深さ８cm、P_{26}は径30×32cm・深さ23cm、P_{27}は径20×39cm・深さ16cm、P_{28}は径32



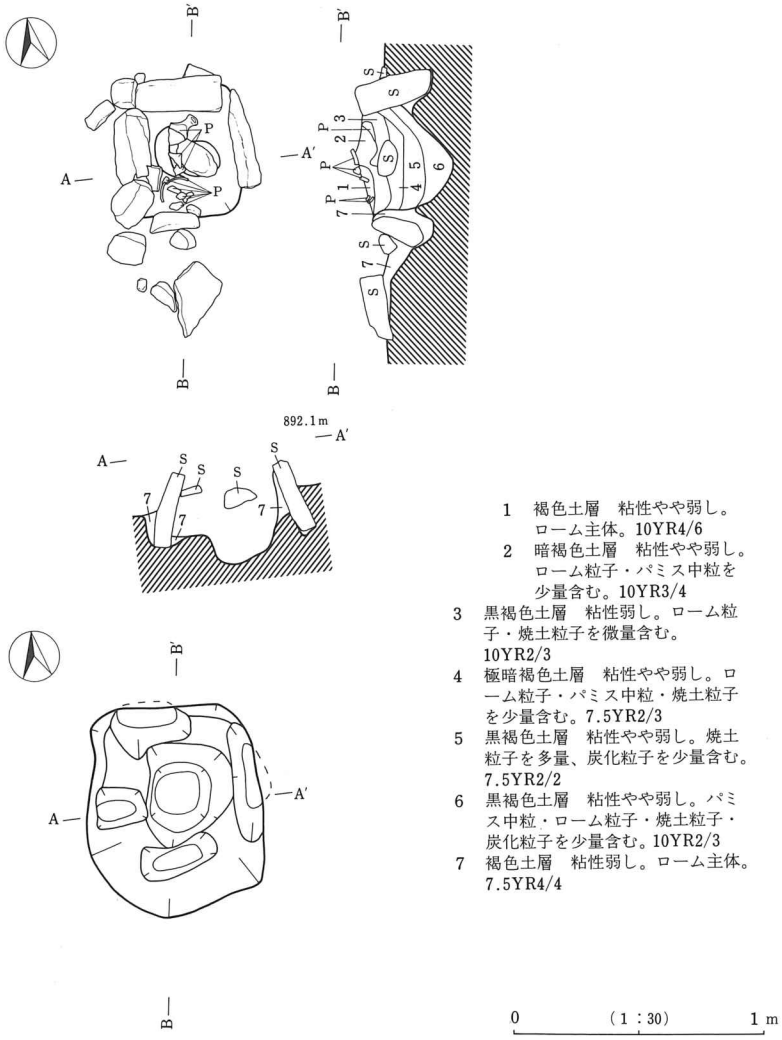
1　褐色土層　粘性弱し。　ローム粒子を少量含む。10YR4/4
2　褐色土層　粘性弱し。パミス中粒・ローム粒子を少量含む。10YR4/6
3　黄褐色土層　粘性弱し。ローム主体。10YR5/6
4　にぶい黄褐色土層　粘性やや弱し。パミス中粒・ローム粒子を多量含む。10YR5/4
5　暗褐色土層　粘性やや強し。パミス中粒を少量含む。10YR3/4
6　褐色土層　粘性弱し。ローム主体。10YR4/6
7　暗褐色土層　粘性弱し。パミス中粒を多量に含む。10YR3/4
8　暗褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子を微量含む。10YR3/3

0　(1：80)　2 m

第5図　第2号住居址実測図



第6図　第2号住居址出土石器実測図(1)

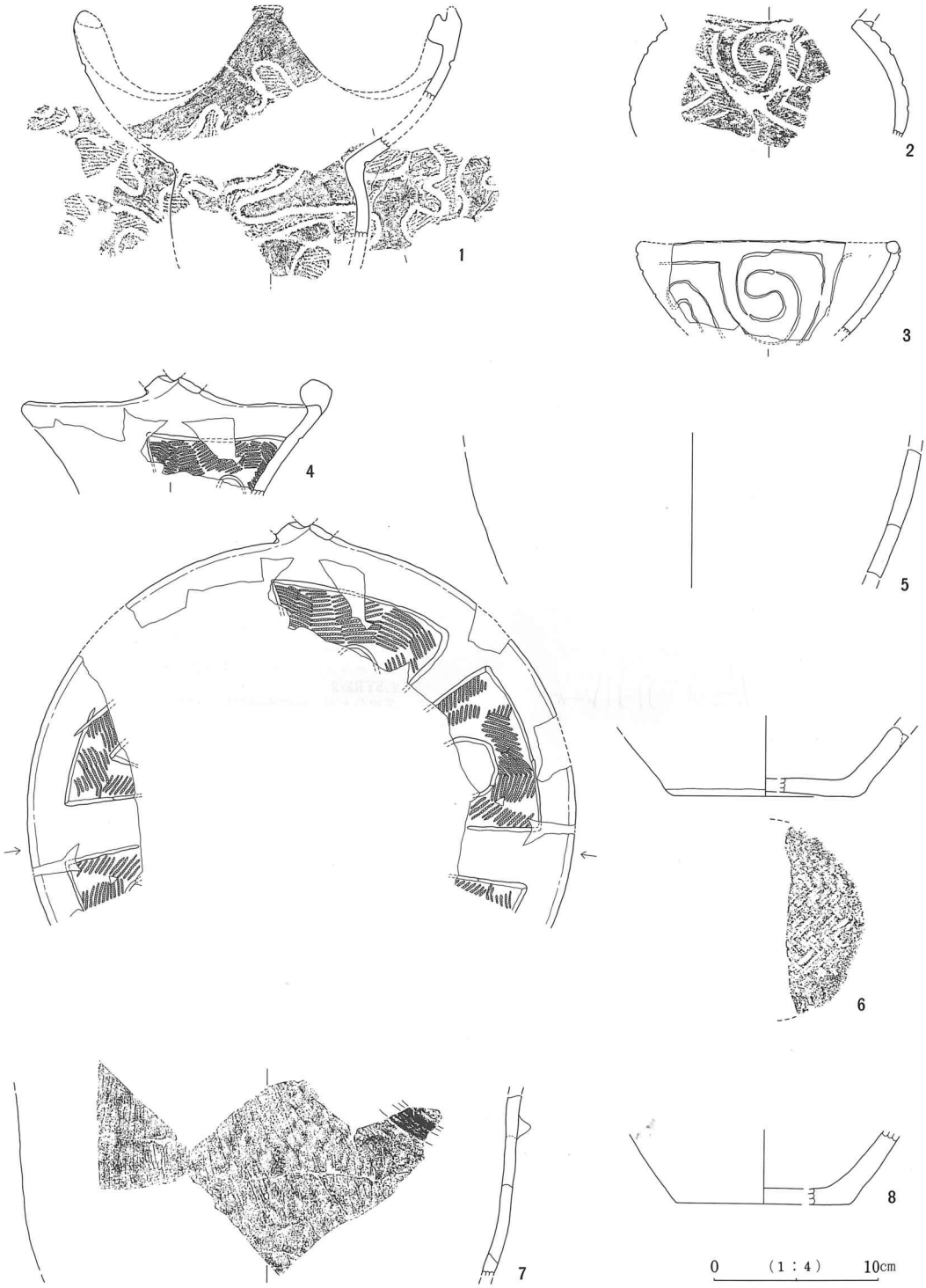


第7図　第2号住号址炉実測図

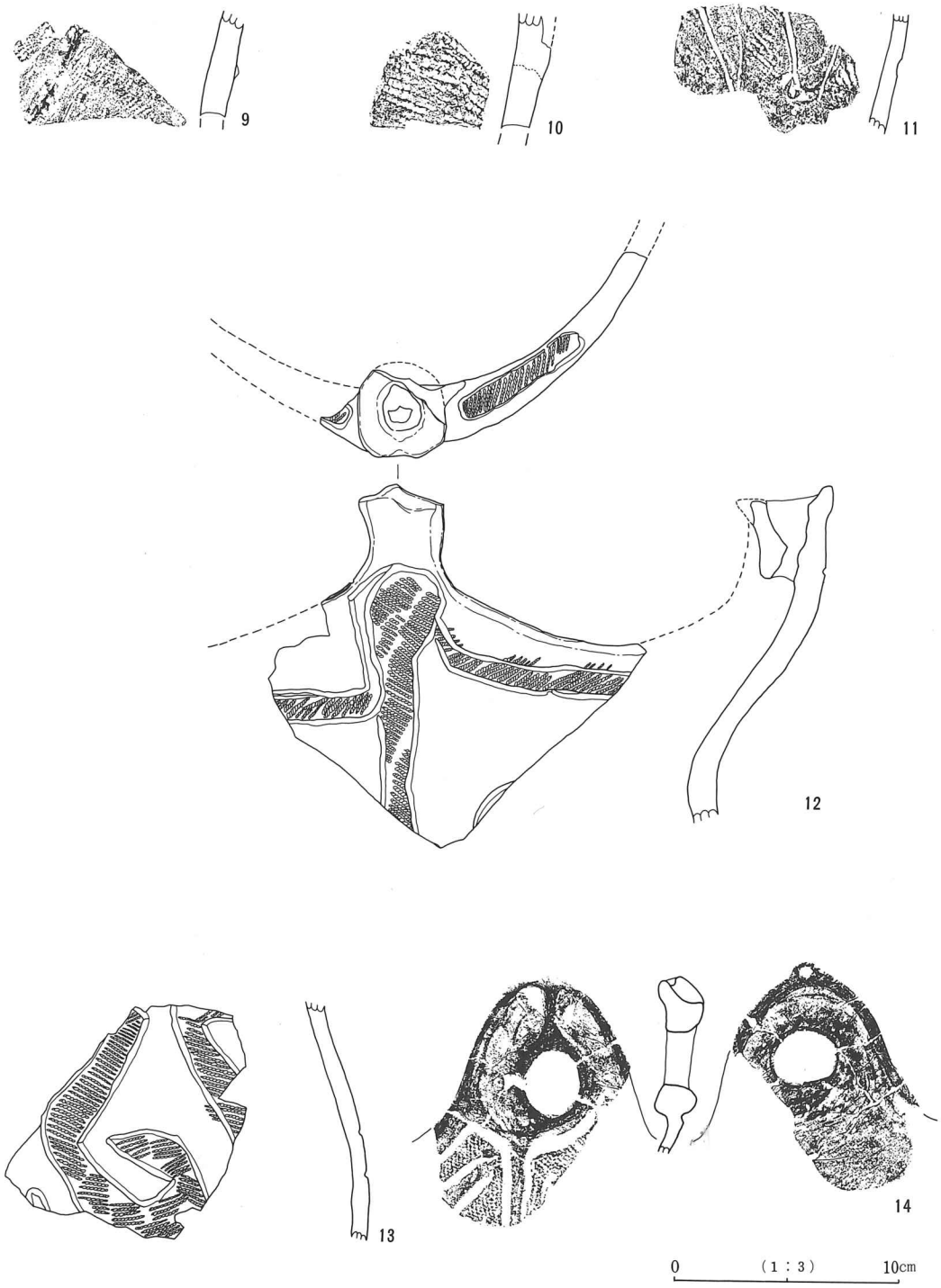
×68cm・深さ23cmを測る。ピットは、P_{22}とP_{28}、張り出し部のP_{23}～P_{27}を除き、全て壁際に円形に配されていた。またその内側に扁平な安山岩が円形に配されていた。なおP_{22}は浅い掘り込みで、東側の一部で焼土が確認された。

炉は住居址のほぼ中央で確認された。方形の石囲炉で、石は全て安山岩を使用している。規模は東西68cm・南北83cmを測る。4個の炉石は全て内傾していた。

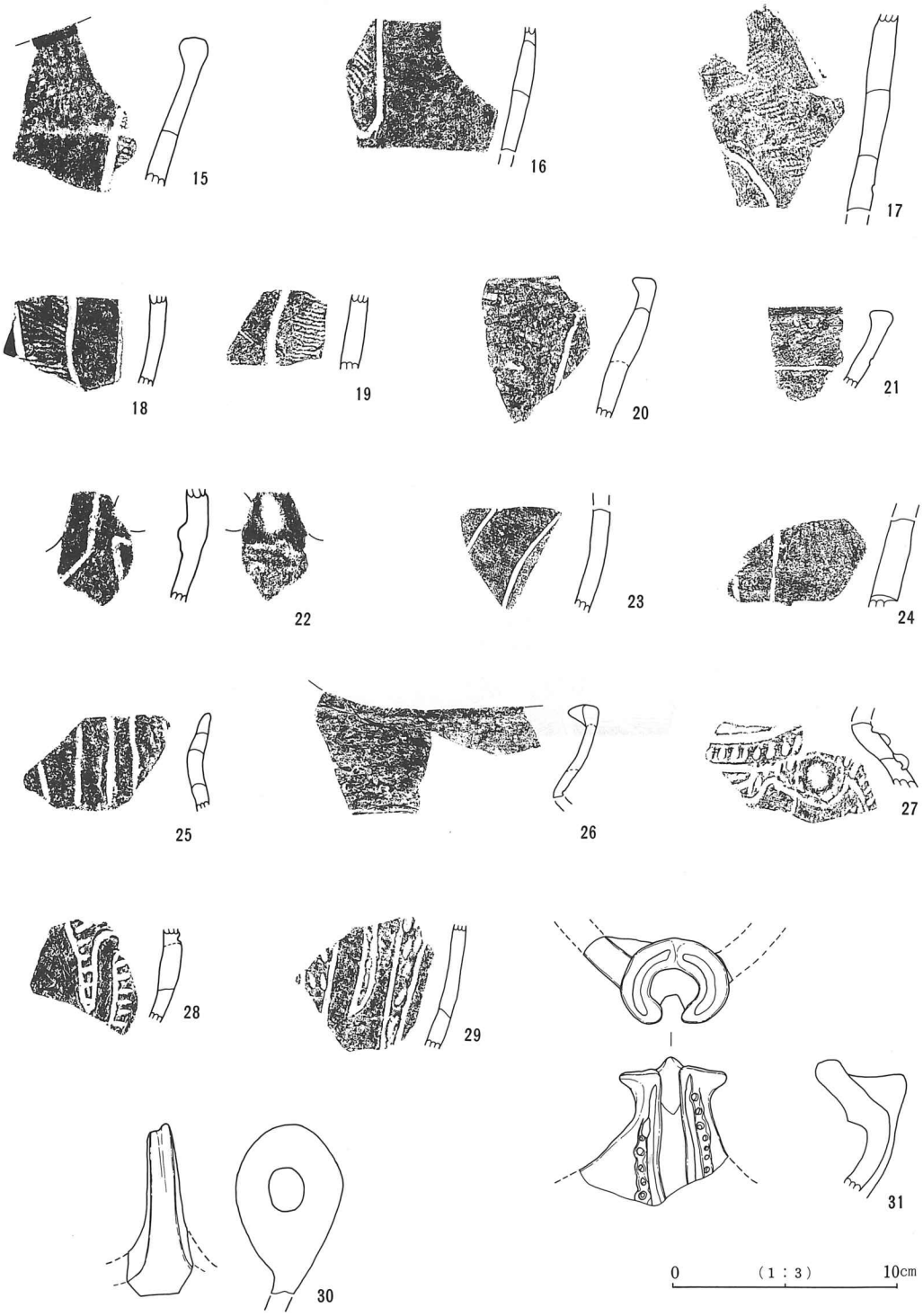
本住居址からは縄文時代中期末葉から後期初頭の土器が出土しており、検出遺構中出土量は最も多いが、個体の残存率は低く器形の全容を窺えるものは無い。石器は、打製石斧・粗割石器・石鏃・石錐・横刃型石器・フレイク・スクレパー・ストーンリタッチャー・磨石・多目的石器・転用炉石等が出土し、49点を図示した。詳細は第4表・第3表を参照されたい。石質は玄武岩が



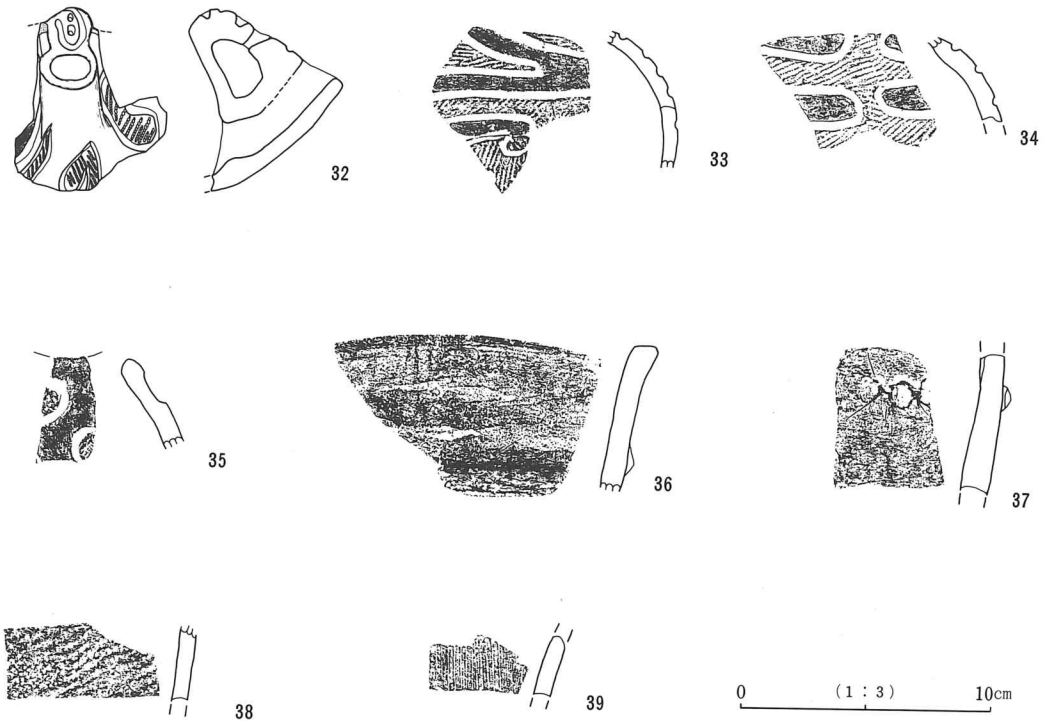
第８図　第２号住居址出土土器実測図(1)



第９図　第２号住居址出土土器実測図(2)



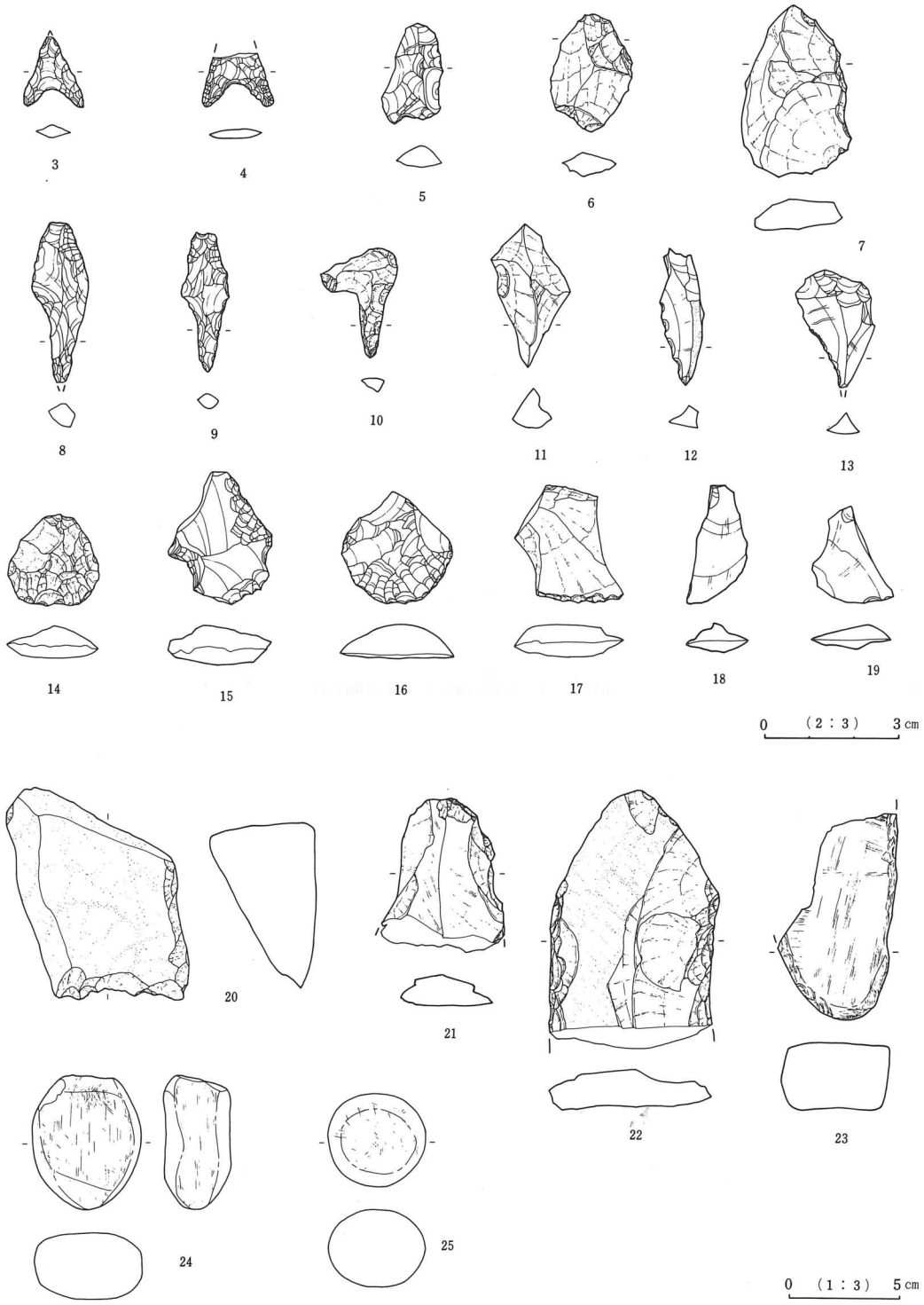
第10図　第２号住居址出土土器実測図(3)



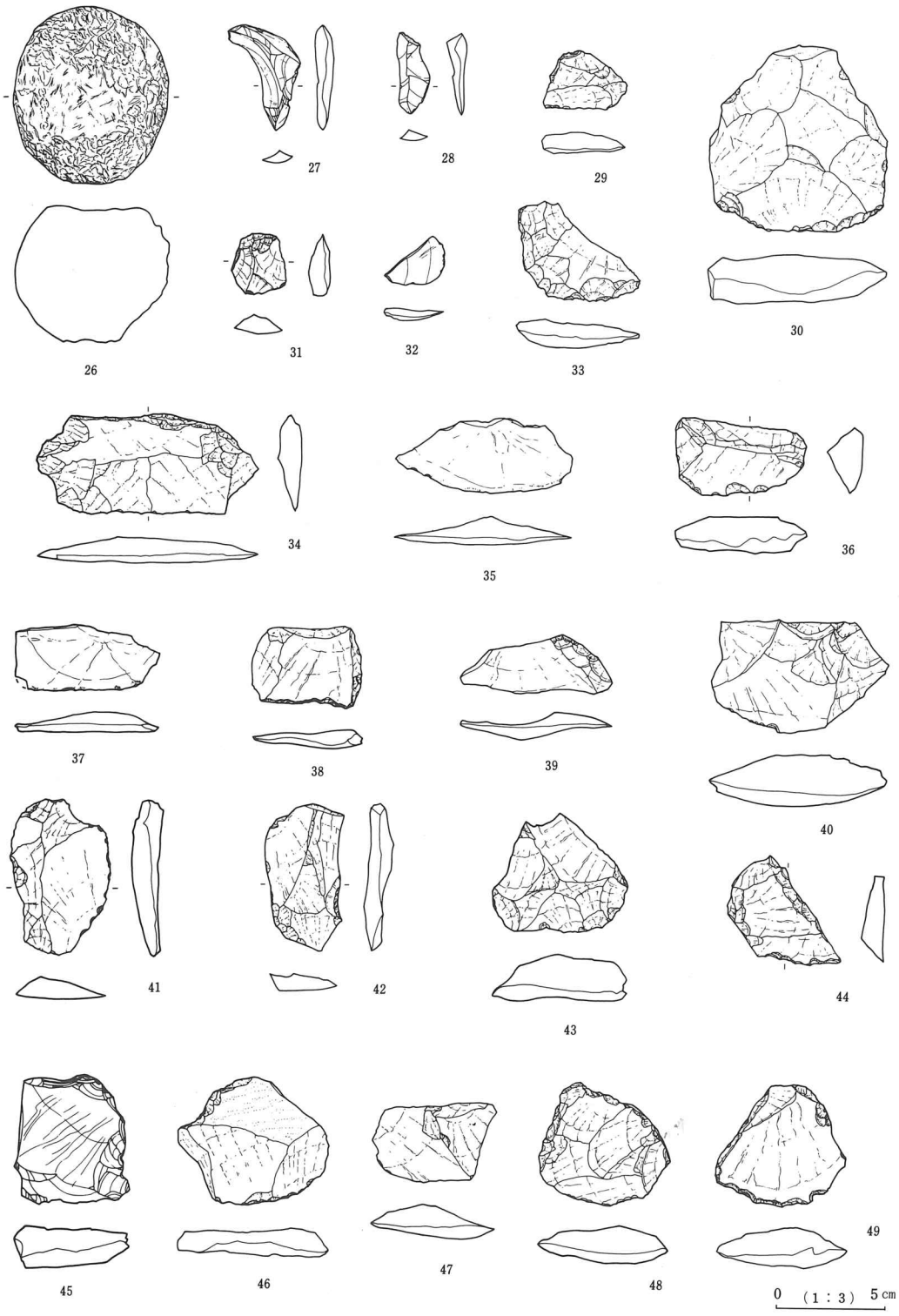
第11図　第２号住居址出土土器実測図(4)

最も多く、他にチャート、黒曜石、輝石安山岩を利用している。土器では、中期末葉（加曽利ＥⅣ式）の伝統を色濃く残すものは９－９のみであり、全体的な様相は称名寺色が強い。称名寺式土器は頸部の括れが強く、器形のプロポーション変換の著しいもの（８－１、10－26・27）が観られる。文様は縄文の施文される区画と施文されない区画が交互に展開する磨消縄文構成を採り、基本的な施文順序は沈線区画→縄文充塡→器面調整の順であるが、縄文を充塡後、再度沈線をなぞるケースがあり、結果的に縄文充塡→沈線区画の順序で施文順序が看取されるものもある。縄文は単節LR撚紐により施文されたものが圧倒的に多く、また刺突文が区画内を充塡するものは少ない。器種には深鉢・注口がある。深鉢は大きな波状縁を呈し、波頂部には突起が貼付されている。注口は精緻なつくりを呈する。胎土には白色粒子が混入され、脆弱で色調は橙色（7.5YR７／６）を呈し、軽質であるものが主体を占める。

以上より本住居址の所産期は、縄文時代中期末葉から後期初頭に位置づけられる。



第12図　第２号住居址出土石器実測図(2)



第13図　第２号住居址出土石器実測図(3)

第１表　第２号住居址出土土器一覧表(1)

挿図番号	器　種	部　位	器　形・文　様・施文順序	時　期	備　考
8－1	深　鉢	口縁部～胴部	細い頸部より口縁が大きく開くキャリパー状器形を呈す。磨消縄文構成。ＬＲ縄文回転施文→曲線的な沈線区画→器面調整。口縁部内側に内折。	後期初頭称名寺式	⌀0.5㎜内外の白色粒子を多量に含む。
8－2	〃	胴　部	磨消縄文構成。連結した「Ｊ」字「Ｘ」字状沈線区画→ＬＲ縄文充填→器面調整。	〃	外面炭化物付着。
8－3	深　鉢？	口縁部	キャリパー状器形？。沈線により連続した「Ｊ」字状文が描かれる。	〃	外面炭化物多量に付着。
8－4	深　鉢	口縁部～胴部	朝顔状器形。磨消縄文構成。パネル状の沈線区画→ＬＲ縄文充填→器面調整。	〃	外面黒色塗彩。精緻なつくりを呈す。
8－5	〃	胴　部	無文。外面縦ミガキ、内面横ミガキ。	〃	⌀１㎜内外の白色粒子を多量に含む。内面炭化物付着。
8－6	〃	底　部	網代痕を有す。	〃	⌀１㎜内外の白色粒子を多量に含む。
8－7	〃	胴　部	断面三角形の隆帯を貼付。内外面ミガキが施される。	〃	精緻なつくりを呈する。
8－8	〃	底　部	網代痕？を有する。	〃	底面火熱を受けた痕跡有。粗雑なつくりを呈する。
9－9	〃	胴　部	微隆起帯により文構区画を構成。微隆起帯貼付→ＬＲ縄文回転施文による充填。	中期末葉～後期初頭	⌀0.5㎜内外の白色砂粒を含む。
9－10	〃	〃	粗いＬＲ縄文回転施文。	〃	
9－11	〃	〃	磨消縄文構成。鋸歯状沈線区画→Ｒ縄文縦位回転施文による区画内充填→器面調整。	〃	⌀0.5㎜内外の白色粒子を少量含む。
9－12	〃	口縁部	筒状突起を有し、キャリパー状器形？を呈する。磨消縄文構成。「Ｊ」字状？沈線区画↔ＬＲ縄文縦・横位回転施文による区画内充填→器面調整。	後期初頭称名寺式	〃
9－13	〃	胴　部	磨消縄文構成。「Ｊ」字状沈線区画↔ＬＲ縄文回転施文による区画内充填→器面調整。	〃	9－12と同一個体の可能性有。
9－14	〃	口縁部	環状突器を有する。磨消縄文構成。沈線区画→ＬＲ縄文回転施文。	〃	外面黒色塗彩？精緻なつくりを呈す。
10－15	〃	〃	波状口縁を呈し、口縁部内側に肥厚する。磨消縄文構成。ＬＲ縄文回転施文↔沈線区画。	〃	外面炭化物付着。砂粒を多量に含む。
10－16	〃	胴　部	磨消縄文構成。楕円状沈線区画↔Ｒ縄文横位回転施文。	〃	外面炭化物付着。精緻なつくりを呈す。
10－17	〃	〃	磨消縄文構成。沈線区画↔ＬＲ縄文斜位回転施文。	〃	砂粒を多量に含む。
10－18	〃	〃	磨消縄文構成。沈線区画↔ＬＲ縄文縦位回転施文→器面調整。	〃	
10－19	〃	〃	磨消縄文構成。沈線区画↔Ｌ縄文斜位回転施文。	〃	
10－20	〃	口縁部	口縁部内側に肥厚。楕円状沈線区画→器画調整。	〃	外面炭化物付着。
10－21	〃	〃	口縁部内側に肥厚。沈線による文様区画を構成？。	〃	外面黒色塗彩？。
10－22	〃	突　起	沈線による文様区画を構成？。突起内側に沈線有す。	〃	⌀0.5㎜内外の白色粒子を含む。
10－23	〃	胴　部	沈線による文様区画を構成。	〃	
10－24	〃	〃	〃	〃	砂粒を多量に含む。
10－25	〃	口縁部	口縁部外反する。口辺部より４条の沈線が垂下する。	〃	

第２表　第２号住居址出土土器一覧表(2)

挿図番号	器　種	部　位	器　形・文　様・施文順序	時　期	備　考
10－26	深　鉢	口縁部	口縁部内折。頸部に沈線が１条巡る。	後期初頭 称名寺式	内外面炭化物付着。
10－27	〃	胴　部	ボタン状貼付文を有する。沈線＋刺突文により区画文様を構成。沈線区画→刺突文充填。	〃	同一個体。
10－28	〃	〃	〃	〃	
10－29	〃	〃	〃	〃	
10－30	〃	把　手	環状を呈し、丁寧なミガキが施される。	〃	胎土・調整８－４・７に類似。
10－31	〃	突　起	波頂部より隆帯が垂下し、隆帯上に列点状刺突文・沈線文が施文される。	〃	
10－32	注　口	注口部	磨消縄文構成。沈縄区画↔ＬＲ縄文構成。	〃	赤色塗彩。精緻なつくりを呈す。
10－33	〃	胴　部	磨消縄文構成。ＬＲ縄文回転施文↔沈線区画。	〃	外面黒色塗彩。精緻なつくりを呈す。
10－34	〃？	〃	磨消縄文構成。L{R{ℓℓℓ / R{ℓℓℓ 縄文横位回転施文→沈線区画。	〃	精緻なつくりを呈す。
10－35	〃	口縁部	局線的な沈線による文様区画を構成。	〃	
10－36	深　鉢	〃	断面三角形の隆帯により、口縁部文様帯と胴部文様帯が分割される。胴部ＬＲ縄文回転施文。	〃？	
10－37	〃	胴　部	指頭圧痕を有する隆帯貼付。	後期初頭	∅１㎜内外の白色粒子を含む。
10－38	〃	〃	ＬＲ縄文縦位回転施文。	〃？	砂粒を多量に含む。
10－39	〃	〃	条線文縦位施文。	中期末葉～後期初頭	

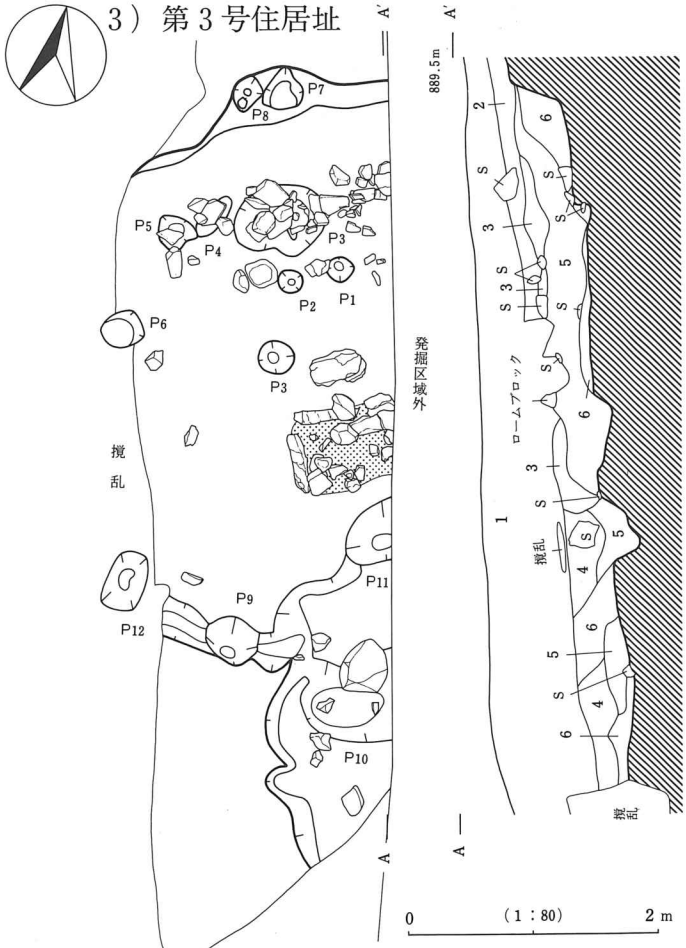
第３表　第２号住居址出土石器一覧表(1)

挿図番号	器　種	石　質	法量 cm 長さ	巾	厚さ	備　考
6－1	炉　石	砂　岩	26.6	11.9	6.9	石皿→多孔石→炉石へと転用
6－2	炉　石	砂　岩	16.7	12.7	10.8	砥石→多孔石→炉石へと転用
12－3	石　鏃	チャート	〈1.5〉	1.3	0.3	凹基
12－4	石　鏃	黒曜石	〈1.2〉	1.6	0.2	凹基
12－5	石　鏃	黒曜石	2.2	1.35	0.6	未成品、調整剝離段階
12－6	石　鏃	玄武岩	2.6	1.8	0.6	未成品、整形段階
12－7	石　鏃	玄武岩	3.9	2.5	0.9	未成品、整形段階
12－8	石　錐	チャート	〈3.6〉	1.3	0.7	
12－9	石　錐	チャート	3.1	1.1	0.9	
12－10	石　錐	玄武岩	2.4	1.75	0.7	
12－11	石　錐	玄武岩	3.2	1.8	1.2	

第4表　第2号住居址出土石器一覧表(2)

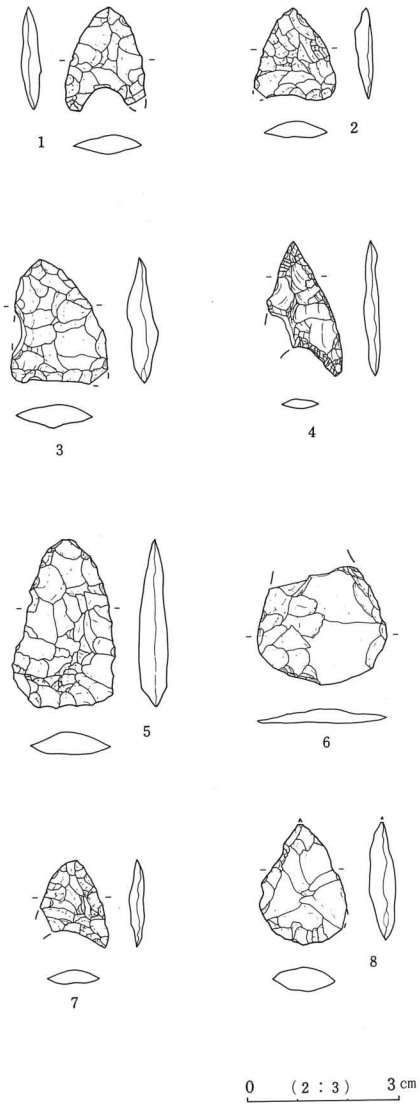
挿図番号	器種	石質	法量 cm			備考
			長さ	巾	厚さ	
12−12	石錐	チャート	3.1	1.0	0.6	
12−13	石錐	チャート	2.6	1.8	0.8	
12−14	スクレパー	玄武岩	2.0	2.0	0.7	全周に刃部を形成
12−15	スクレパー	黒曜石	3.0	2.3	0.9	
12−16	スクレパー	黒曜石	2.4	2.5	0.7	
12−17	スクレパー	玄武岩	2.6	2.4	0.7	一辺に刃部を形成
12−18	フレイク	チャート	3.6	1.2	0.7	使用擦過痕有
12−19	フレイク	チャート	2.2	1.8	0.55	使用磨耗痕有
12−20	粗割石器	安山岩	9.6	8.2	4.7	礫器
12−21	打製石斧	安山岩	〈6.9〉	5.5	1.5	刃部欠損
12−22	打製石斧	安山岩	〈11.5〉	7.8	1.6	刃部欠損
12−23	多目的石器	安山岩	〈9.2〉	5.3	3.1	砥石(四面)と敲石併用
12−24	磨石	玄武岩	6.1	4.9	3.1	著しく磨耗し光沢を持つ
12−25	磨石	安山岩	4.2	4.4	3.5	使用擦過痕有
13−26	ストーンリタッチャー	玄武岩	8.0	6.9	6.1	全面に鼠歯状痕有
13−27	スクレパー	チャート	4.9	1.9	0.85	全周に刃部を形成
13−28	スクレパー	チャート	3.7	1.4	0.9	二辺に刃部を形成
13−29	スクレパー	玄武岩	3.8	2.5	0.9	一辺に刃部を形成
13−30	打製石斧	玄武岩	8.4	8.4	2.2	
13−31	スクレパー	玄武岩	2.8	2.4	1.0	二辺に刃部を形成
13−32	フレイク	チャート	2.7	2.2	0.5	使用磨耗痕有
13−33	スクレパー	玄武岩	5.5	4.9	1.3	
13−34	横刃型石器	安山岩	10.2	4.6	1.2	
13−35	フレイク	玄武岩	8.1	3.4	1.25	横刃型、刃部に使用痕
13−36	スクレパー	玄武岩	6.0	3.5	2.7	二辺に刃部を形成、使用磨耗痕有
13−37	フレイク	玄武岩	6.5	3.0	0.9	横刃型、刃部に使用痕
13−38	スクレパー	玄武岩	5.0	3.7	0.9	一辺に刃部を形成
13−39	フレイク	安山岩	6.9	2.5	0.9	使用磨耗痕有
13−40	スクレパー	玄武岩	8.1	5.1	2.4	石核利用（コア・ツール）
13−41	横刃型石器	玄武岩	7.0	4.4	1.3	一辺に刃部を形成、使用磨耗痕有
13−42	スクレパー	玄武岩	6.7	3.3	1.1	二辺に刃部を形成、使用磨耗痕有
13−43	スクレパー	玄武岩	6.1	5.3	1.9	一辺に刃部を形成
13−44	スクレパー	玄武岩	5.9	3.1	1.2	一辺に刃部を形成
13−45	スクレパー	チャート	5.8	5.2	1.9	一辺に刃部を形成
13−46	スクレパー	安山岩	6.9	5.8	1.3	刃部に使用磨耗痕有
13−47	フレイク	玄武岩	5.6	3.6	1.4	使用磨耗痕有
13−48	スクレパー	チャート	5.9	5.5	1.7	一辺に刃部を形成
13−49	スクレパー	玄武岩	5.5	5.9	1.8	一辺に刃部を形成

3）第３号住居址



1　黒褐色土層　耕作土。10YR2/3
2　暗褐色土層　粘性やや弱し。スコリアを微量、ローム粒子を少量含む。10YR3/4
3　褐色土層　粘性弱し。ローム粒子を多量、スコリア・パミス小粒を微量含む。10YR4/4
4　暗褐色土層　粘性やや弱し。スコリア・パミス小粒を微量、ローム粒子を少量含む。10YR3/3
5　暗褐色土層　粘性やや強し。炭化粒子・スコリアを微量、ローム粒子を少量含む。10YR3/3
6　褐色土層　粘性弱し。ローム主体。10YR4/6

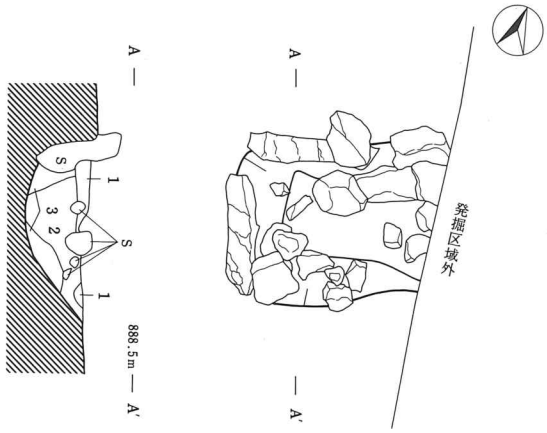
第14図　第３号住居址実測図



第15図　第３号住居址出土石器実測図

第３号住居址は、調査区の南側、あ・い－１～３グリッド内において検出され、南側と西側を撹乱によって破壊される。

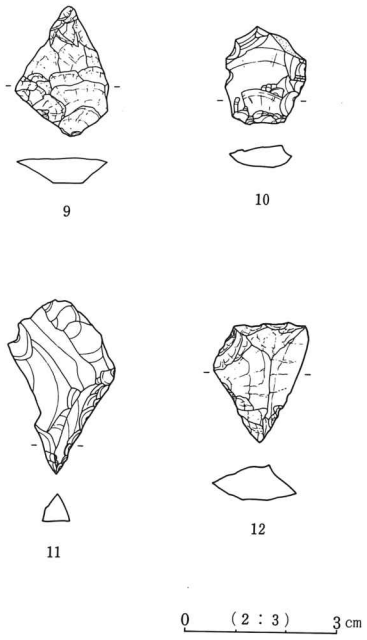
平面形態は円形を呈し、南側に張り出し部を持つと考えられる。現存する規模は南北470cm（張り出し部を含めて614cm）を測る。壁高は残存する北壁で29～49cm、南壁で４～８cmを測る。ピットは12個が検出された。P_1は径20×22cm・深さ14cm、P_2は径18×20cm・深さ12cm、P_3は径26×29cm・径17cm、P_4は径18×31cm・深さ10cm、P_5は径27cm・深さ29cm、P_6は径27×32cm・深



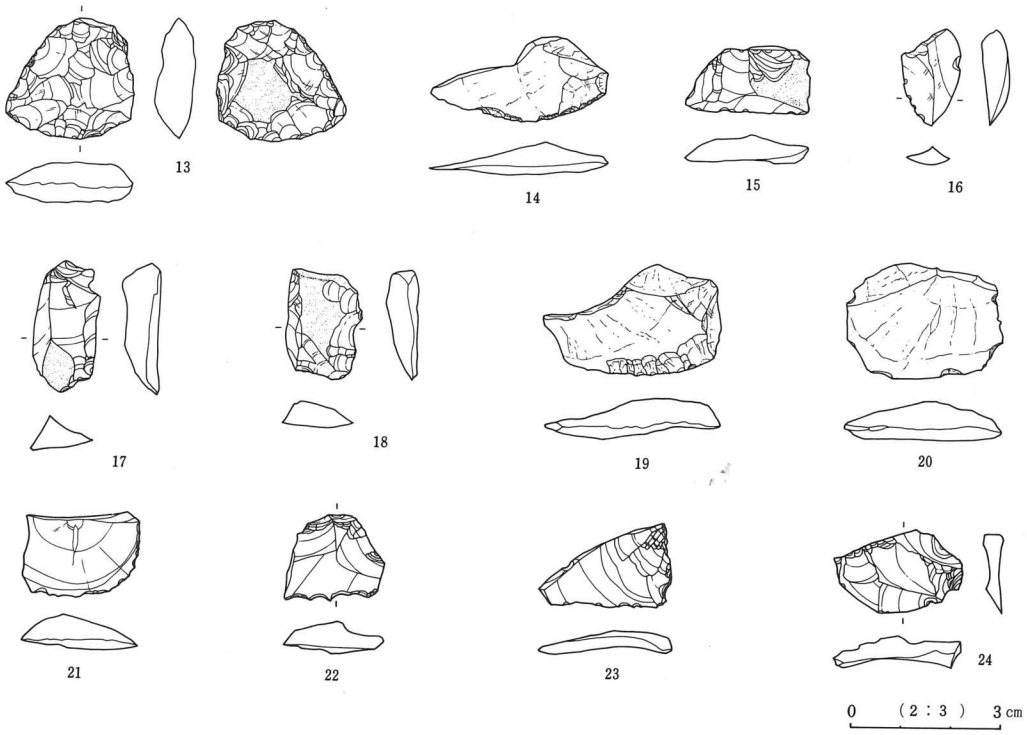
1　暗褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子・スコリア・炭化粒子を少量含む。10YR3/3
2　褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子・スコリアを少量含む。7.5YR4/4
3　褐色土層　粘性やや弱し。焼土主体。7.5YR 4/6

0　(1：30)　1 m

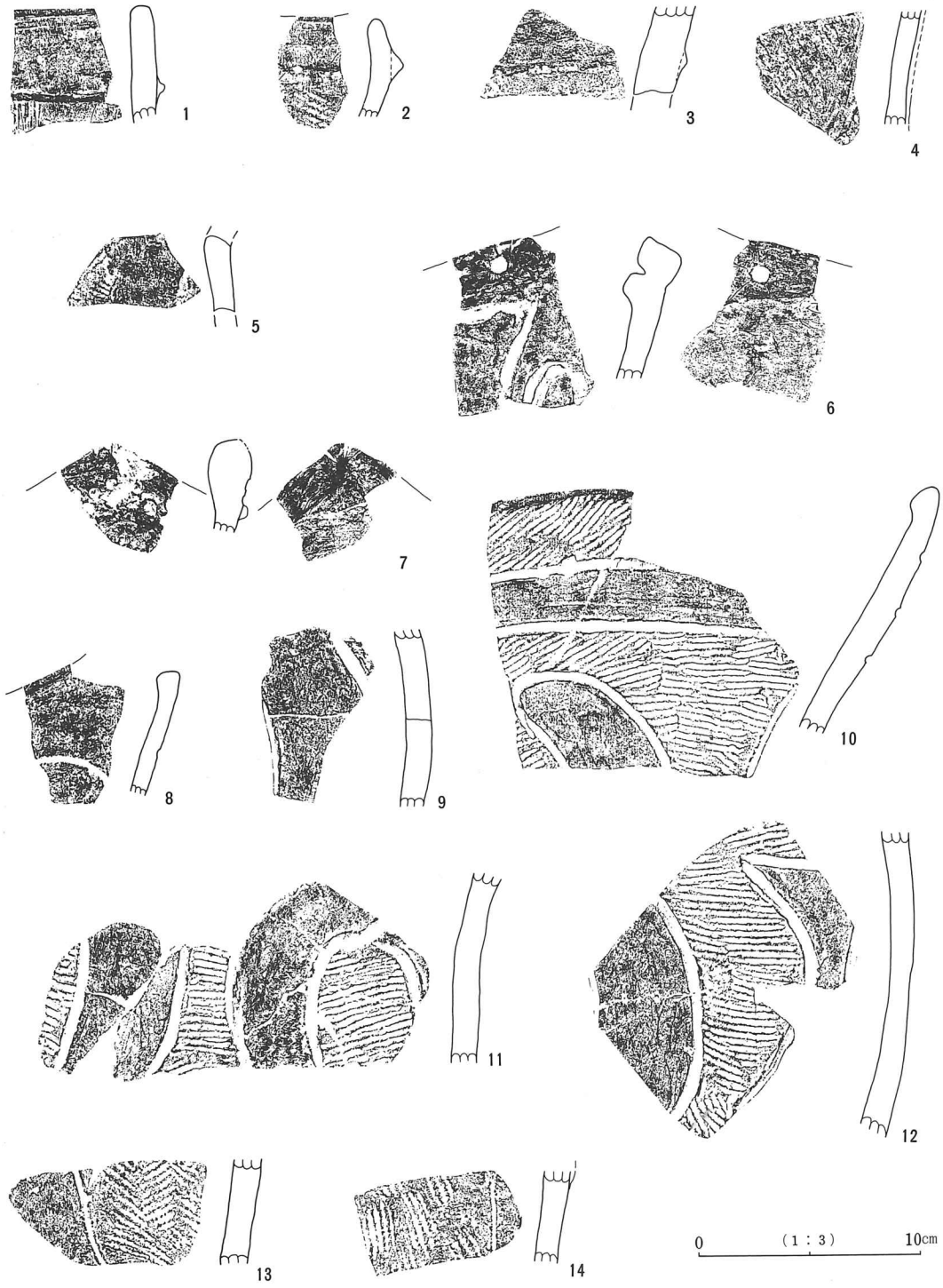
第16図　第3号住居址炉実測図



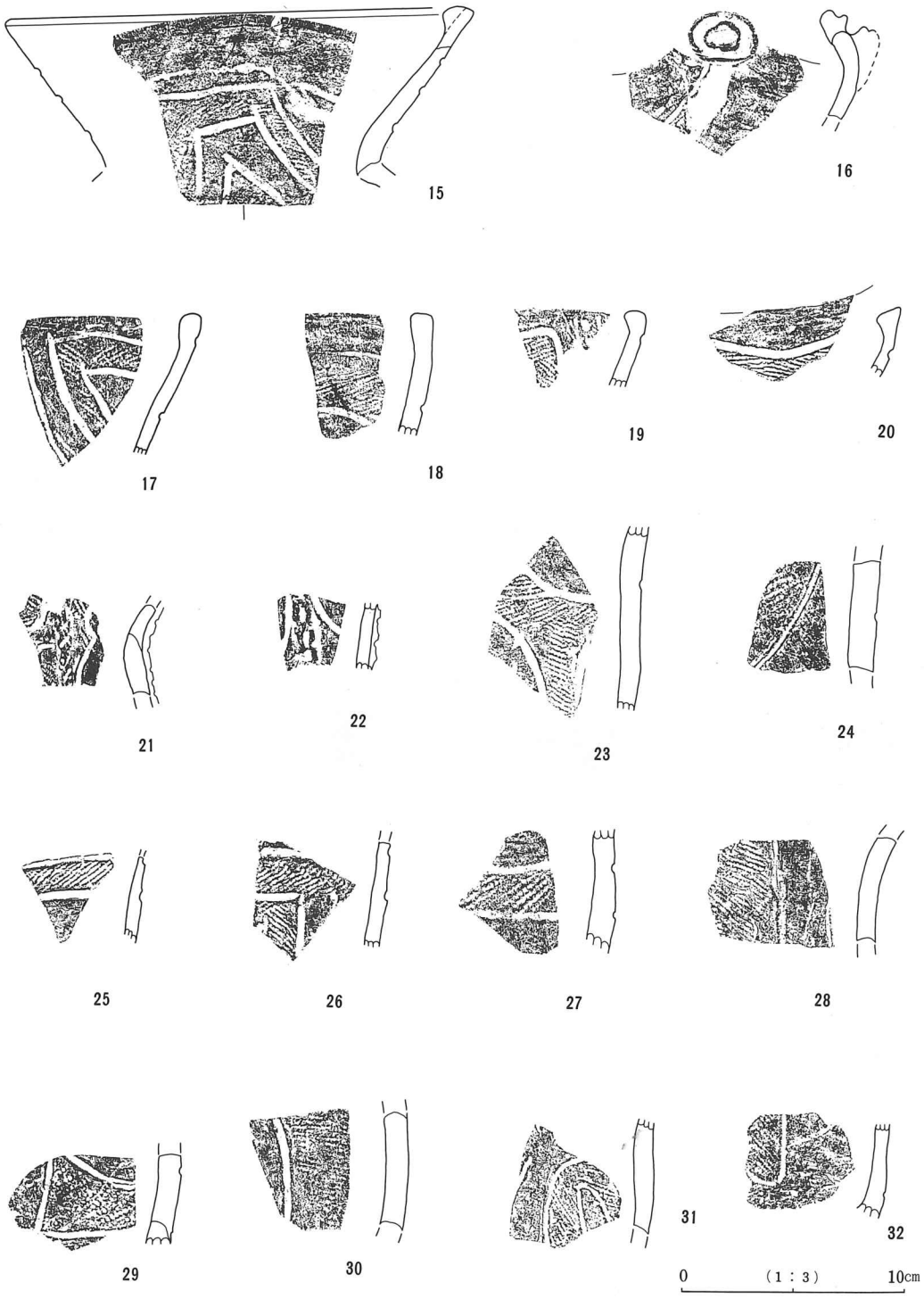
第17図　第3号住居址出土石器実測図(2)



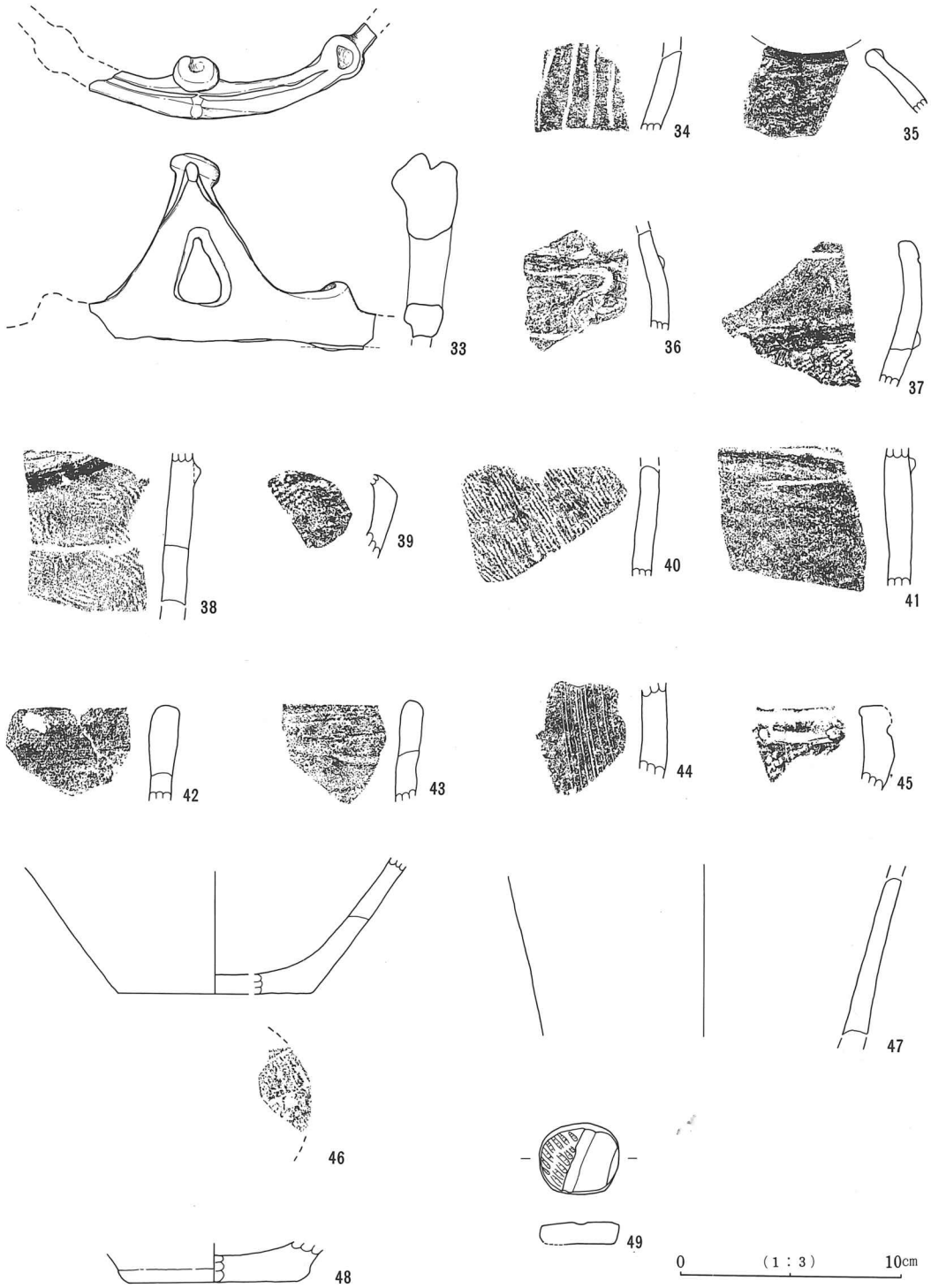
第18図　第3号住居址出土石器実測図(3)



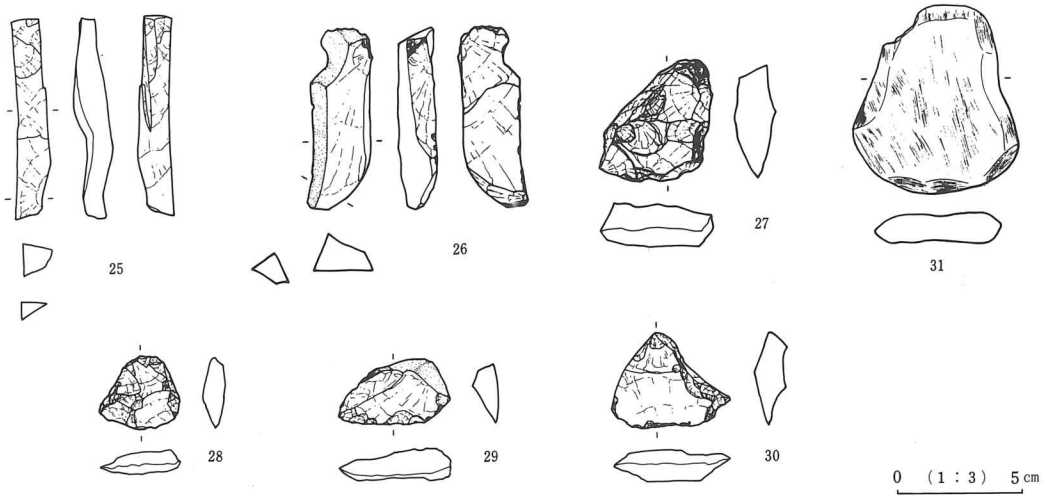
第19図　第３号住居址出土土器実測図(1)



第20図　第３号住居址出土土器実測図(2)



第21図　第３号住居址出土土器実測図(3)



第22図　第３号住居址出土石器実測図(4)

さ54cm、P_7は径34cm・深さ39cm、P_8は径24×31cm・深さ43cm、P_9は径35×43cm・深さ31cm、P_{10}は径61×72cm・深さ８cm、P_{11}は径39×44cm・深さ32cm、P_{12}は径30×49cm・深さ39cm、P_{13}は径56×74cm・深さ53cmを測る。北壁際に安山岩が多量に散乱しており、第２号住居址の様な配石の存在も考えられる。

炉は住居址の中央よりやや南よりで検出された。方形の石囲炉で、炉石は全て安山岩を使用していた。規模は南北が66cm、東西が現長86cmを測る。なお南側の炉石は配石の位置を崩していた。

本住居址からは、縄文時代中期末葉から後期初頭の土器が出土している。出土量は第２号住居址に次いで多いが、全容の把握ができるものは無い。石器は、石鏃・石錐・スクレパー・フレイク・刃器状石器・楔形石器・砥石・石核等が出土し、31点を図示した。石質は玄武岩が最も多く、他にチャート・黒曜石・砂岩・安山岩が利用される。22－25・26は刃器状石器としたが、両者は製作方法も剥片も違うが、スクレパーと分けるため仮称で刃器状とした。また22－28は形状が楔形であるため楔形としたが、ピエスエスキーユや両極調整石器とは分けて考えた。なお本住居址からは打製石斧が破片も含めて出土していない。なお、詳細は第７表を参照されたい。土器の全体的な様相は後期初頭（称名寺式）色が強いが、第２号住居址に比べ中期末葉（加曽利ＥⅣ式）の出土量が多い。19－１～５・７は微隆帯により文様区画を構成する加曽利ＥⅣ式である。称名寺式土器は頸部の括れが弱いものが多く、強く括れるものは20－15のみである。文様は磨消縄文構成を採り、縄文の撚方向はLRが優勢である。また列点文の使用されたものは無い。器種には深鉢・甕・注口？がある。胎土には白色粒子が混入され、脆弱な傾向を示す。色調は橙色（7.5YR７／６）を呈し、非常に軽質なものが多い。

以上より本住居址の所産期は、縄文時代中期末葉から後期初頭に位置づけられる。

第５表　第３号住居址出土土器一覧表(1)

挿図番号	器　種	部　位	器　型・文　様・施文順序	時　期	備　考
19－1	深　鉢	口縁部	微隆起帯による文様区画を構成。上無文・下条線を縦位施文。	中間末葉～後期初頭	∅0.5㎜内外の白色粒子を含む。
19－2	〃	〃	微隆起帯による文様区画を構成。上無文・下ＬＲ縄文縦位回転施文。	〃	
19－3	〃	胴　部	微隆起帯による文様区画を構成。	〃	∅１㎜内外の砂粒を多量に含む。
19－4	〃	〃	微隆起帯による文様区画を構成。区画内Ｌ縄文横位回転施文	〃	
19－5	〃	〃	磨消縄文様構成。ＲＬ・ＬＲ縄文施文→磨消し		∅0.5㎜内外の白色粒子を少量含む。
19－6	〃	〃	波状縁を呈し、口縁部内側に肥厚。幅約５㎜の沈線による区画文を構成。口唇部・内面肥厚部に同一施文具による円形刺突文を有する。 内外面共に丁寧なミガキが施される。	〃	
19－7	〃	口縁部	波頂部。微隆起帯による文様区画を構成。上∅約５㎜の円形刺突文・下ＬＲ縄文充填。波頂部内側に突起有する。	〃	∅１㎜内外の茶褐色土粒を含む。
19－8	〃	〃	波状口縁。口縁部内側に肥厚。沈線による区画文を構成。	後期初頭 称名寺式	∅１㎜内外の白色粒子を少量含む。
19－9	〃	胴　部	幅約６㎜の沈線による文様区画を構成。	〃	同一個体。 ∅１㎜内外の白色粒子を含む。
19－10	〃	口縁部	プロポーション変換の緩いキャリバー状器形。磨消縄文構成。器面調製・Ｌ縄文斜位回転施文→沈線区画。	〃	
19－11	〃	頸　部	〃	〃	
19－12	〃	胴　部	〃	〃	
19－13	〃	〃	磨消縄文構成。Ｌ縄文縦・横位回転施文による羽状縄文構成。	中期末葉～後期初頭	同一個体。 石英粒を多量に含む。
19－14	〃 〃	〃	〃	〃	
20－15	〃	口縁部	口唇部内側に肥厚。磨消縄文構成。ＲＬ縄文施文→重「コ」字状沈線区画。	後期初頭 称名寺式	外面炭化物付着。
20－16	〃	〃	口縁部内湾し、吸盤状の小突起を有す。突起より垂下する隆帯剝落。	後期初頭	∅0.5㎜内外の白色粒子を含む。
20－17	〃	〃	口縁部内側に肥厚。幾何学状の沈線区画による磨消縄文構成。ＬＲ縄文縦・横位に施文。	後期初頭 称名寺式	外面黒色塗彩
20－18	〃	〃	磨消縄文構成。ＬＲ縄文横位施文。	〃	
20－19	〃	〃	口縁部内側に肥厚。磨消縄文構成。区画内ＲＬ縄文・刺突文施文。縄文施文→沈線区画→器面調整。	〃	精緻なつくりを呈する。
20－20	〃	〃	波状口縁。口縁部内側に肥厚。磨消縄文構成。Ｌ縄文施文→沈線区画。	〃	
20－21	〃	頸　部	磨消縄文構成＋垂下隆帯貼付。隆帯貼付→斜位刻み。沈線区画→ＬＲ縄文充填、局部的にＬＲ縄文施文→沈線区画。	〃	
20－22	〃	胴　部	沈線による区画文＋鎮状隆帯垂下。	〃	∅0.5㎜内外の白色粒子を含む。
20－23	〃	〃	磨消縄文構成。Ｒ・ＲＬ縄文充填→沈線区画。	〃	外面炭化物付着。
20－24	〃	〃	磨消縄文構成。Ｌ縄文縦位回転施文。	中期末葉～後期初頭	砂粒を多量に含む。
20－25	〃	口縁部 ?	磨消縄文構成。Ｌ縄文横位回転施文→沈線区画→器面調整。	後期初頭 称名寺式	精緻なつくりを呈する。
20－26	〃	〃	幾何学状の沈線区画による磨消縄文構成。Ｌ縄文縦・横位回転施文→沈線区画。		〃

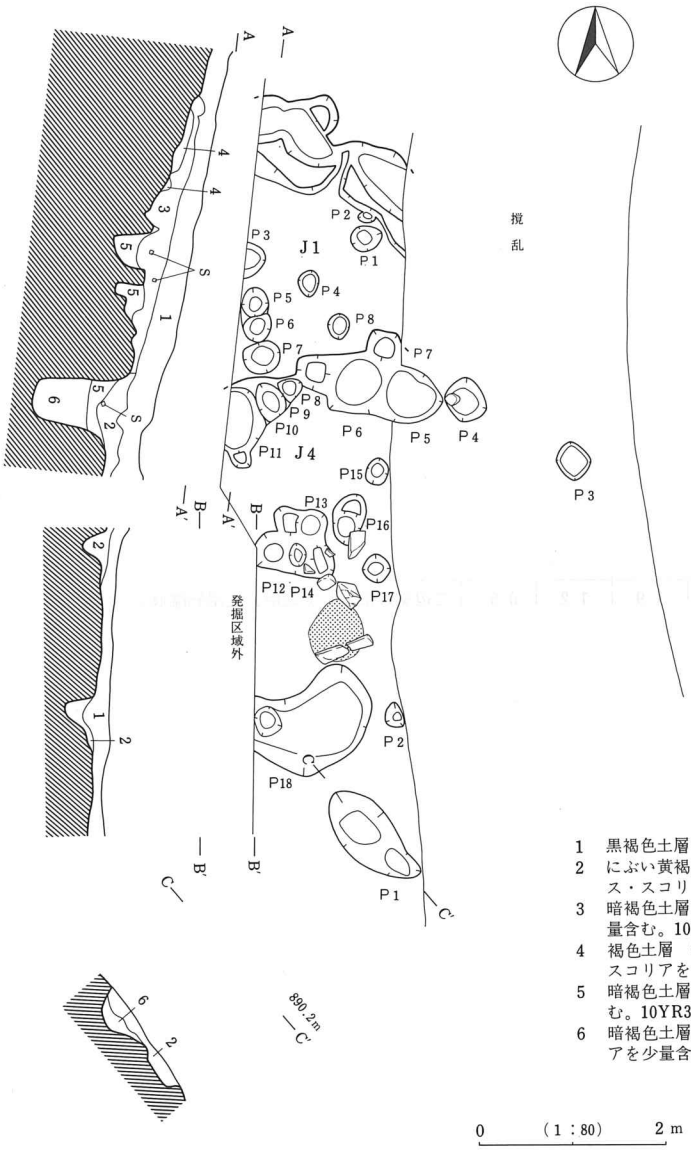
第6表　第3号住居址出土土器一覧表(2)

挿図番号	器種	部位	器形・文様・施文順序	時期	備考
20－27	深鉢	胴部	磨消縄文構成。沈線区画→ＬＲ縄文横位回転施文による区画内充塡。	後期初頭 称名寺式	∅0.5㎜内外の白色粒子を含む。
20－28	〃	〃	磨消縄文構成。Ｌ縄文縦位回転施文→沈線区画。	中期末葉～後期初頭	∅砂粒を多量に含む。
20－29	〃	〃	磨消縄文構成。ＬＲ縄文施文・沈線区画→器面調整。	後期初頭	雲母細片を少量含む。
20－30	〃	〃	磨消縄文構成。Ｌ縄文斜位回転施文。	〃 称名寺式	∅0.5㎜前後の白色粒子を多量に含む。
20－31	〃	〃	磨消縄文構成。沈線区画→Ｌ縄文縦回転による区画内充塡。	〃	外面炭化物付着。
20－32	〃	底部直上	磨消縄文構成。ＬＲ縄文縦位回転施文。	〃	外面凹凸が顕著。
21－33	〃？	口縁部	三角形の橋状把手を有する。口唇部には沈線文・刺突文が施される。	〃？	内外面炭化物付着。
21－34	〃	胴部	４条の沈線文垂下。	〃	〃
21－35	注口?	口縁部	口唇部綾形成して肥厚。無文。内面指頭痕顕著。	〃？	
21－36	〃	胴部	微隆起帯・沈線により区画を構成。	〃	
21－37	深鉢	口縁部	隆帯により口縁部無文帯と胴部文様帯を区画。下ＲＬ縄文縦位施文。	後期初頭	砂粒を多量に含む。
21－38	〃	胴部	微隆起帯により文構区画を構成。下Ｌ？縄文複雑方向に回転施文。	〃	
21－39	〃	口縁部	口縁部内側に内折。器面調整は粗雑。	〃？	砂粒を多量に含む。
21－40	〃	胴部	ＬＲ縄文斜位回転施文。内面は丁寧なミガキが施される。	〃	∅0.5㎜内外の白色粒子を含む。
21－41	〃	〃	細い隆帯が横走する。	〃	石英状粒子を多量に含む。
21－42	〃	口縁部	無文。	〃	砂粒を多量に含む。
21－43	〃	〃	無文。	〃	雲母細片を含む。
21－44	〃	胴部	条線文垂下。	〃	砂粒を含む。
21－45	〃？	口縁部	刺突文＋弧状沈線・ＬＲ縄文横位回転施文。	〃 称名寺式	白色砂粒少量含む。
21－46	〃	底部		〃？	底裏面木葉痕有す。 内面炭化物多量に付着。
21－47	〃	胴部	外面ケズリ調整。	後期初頭	外面炭化物付着。∅0.5㎜内外の白色粒子を含む。
21－48	〃	底部	底裏面もミガキが施される。	〃？	砂粒を多量に含む。
21－49	土製円盤		外周は丁寧な摩削りが施される。	称名寺式以降	称名寺式土器胴部破片を使用。

第7表　第3号住居址出土石器一覧表

挿図番号	器種	石質	法量 cm			備考
			長さ	巾	厚さ	
15－1	石鏃	玄武岩	2.0	1.6	0.35	凹基
15－2	石鏃	玄武岩	2.4	1.9	0.5	平基
15－3	石鏃	玄武岩	1.3	1.6	0.35	平基
15－4	石鏃	黒曜石	2.7	〈1.5〉	0.3	凹基
15－5	石鏃	玄武岩	3.3	2.0	0.6	円基
15－6	石鏃	玄武岩	〈2.3〉	2.6	0.3	円基
15－7	石鏃	玄武岩	〈1.8〉	〈1.3〉	0.3	凹基
15－8	石鏃	玄武岩	〈2.3〉	〈1.7〉	0.55	円基
17－9	石鏃	玄武岩	2.5	1.8	0.5	未成品、剝離調整段階
17－10	石鏃	黒曜石	1.9	1.6	0.5	未成品、剝離調整段階
17－11	石錐	チャート	3.4	2.15	1.1	
17－12	石錐	玄武岩	2.4	1.8	0.8	
18－13	スクレパー	チャート	2.5	2.35	0.8	全周に刃部を形成
18－14	フレイク	玄武岩	3.5	1.7	0.65	一辺に刃部を形成
18－15	スクレパー	黒曜石	2.4	1.35	0.5	二辺を刃部として使用、使用剝離痕有
18－16	フレイク	チャート	1.9	1.2	0.5	二辺を刃部として使用、使用剝離痕有
18－17	スクレパー	黒曜石	2.6	1.3	0.65	二辺に刃部を形成
18－18	スクレパー	黒曜石	2.2	1.5	0.65	三辺に刃部を形成
18－19	スクレパー	玄武岩	3.5	2.2	0.7	一辺に刃部を形成（両面剝離）
18－20	フレイク	玄武岩	3.1	2.3	0.75	一辺を刃部として使用
18－21	フレイク	チャート	2.3	1.6	0.7	一辺を刃部として使用、使用剝離痕有
18－22	スクレパー	チャート	2.0	1.7	0.6	一辺に刃部を形成
18－23	スクレパー	チャート	2.6	1.7	0.35	一辺に刃部を形成
18－24	スクレパー	チャート	2.55	1.7	0.45	一辺に刃部形成、使用剝離痕有
22－25	刃器状石器	玄武岩	7.9	1.3	1.35	一辺に刃部形成
22－26	刃器状石器	玄武岩	7.2	2.3	1.5	一辺に刃部形成、使用剝離痕有
22－27	楔形石器	玄武岩	4.8	4.4	1.7	
22－28	スクレパー	玄武岩	3.2	2.8	0.9	一辺に刃部形成
22－29	スクレパー	玄武岩	4.4	2.6	1.3	一辺に刃部形成
22－30	スクレパー	玄武岩	4.6	3.7	1.3	一辺に刃部形成
22－31	砥石	砂岩	7.5	6.5	1.3	全面使用

4）第４号住居址

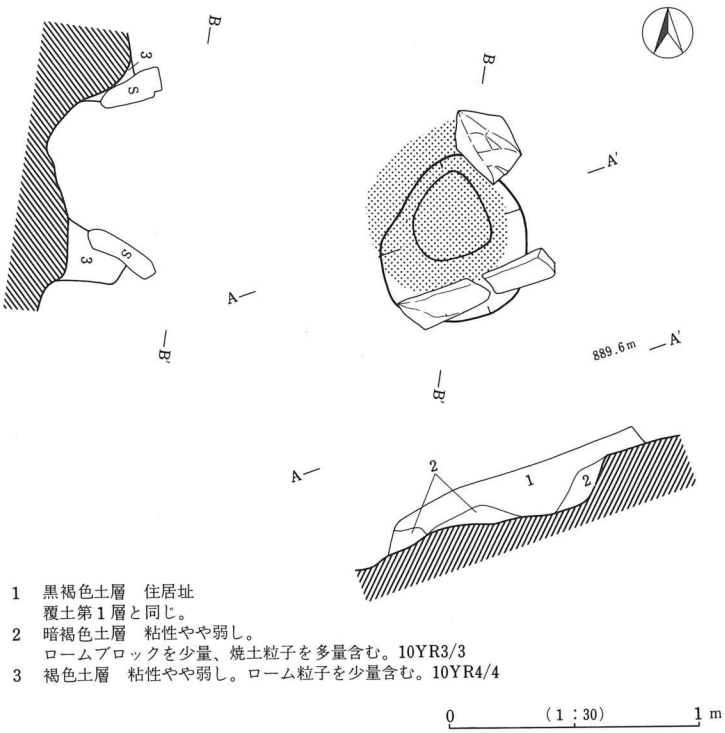


1　黒褐色土層　耕作土。10YR2/3
2　にぶい黄褐色土層　粘性弱し。ローム粒子・パミス・スコリアを少量含む。10YR4/3
3　暗褐色土層　粘性弱し。ローム粒子・パミスを少量含む。10YR3/4
4　褐色土層　粘性やや強し。ローム主体。パミス・スコリアを少量含む。10YR4/4
5　暗褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子を多量含む。10YR3/4
6　暗褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子・スコリアを少量含む。10YR3/3

第23図　第１号・第４号住居址実測図

第４号住居址は、調査区のほぼ中央、い・う－４・５グリッド内において検出され、東側を撹乱によって破壊される。

平面形態は、残存部分より円形を呈すると考えられる。壁高は残存する北壁で19～22cmを測る。ピットは18個が検出された。P_1は径56×120cm・深さ30cm、P_2は径21×26cm・深さ23cm、P_3は径36×41cm・深さ22cm、P_4は径37×46cm・深さ32cm、P_5は径57×65cm・深さ53cm、P_6は径56

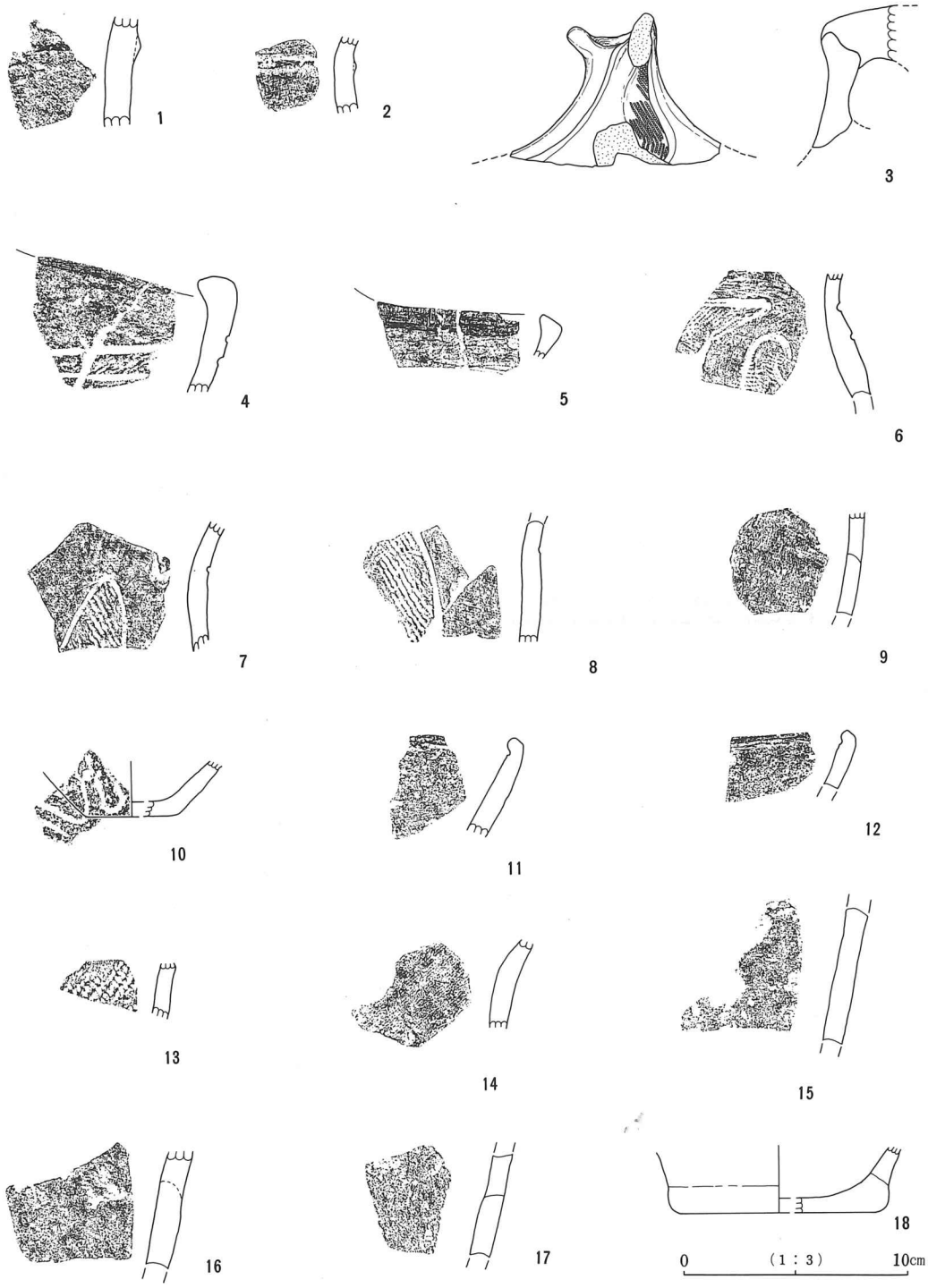


第24図　第4号住居址炉実測図

×72cm・深さ65cm、P_7は径32×36cm・深さ9cm、P_8は径36×46cm・深さ40cm、P_9は径24×26cm・深さ7cm、P_{10}は径30×41cm・深さ18cm、P_{11}は径74cm・深さ88cm、P_{12}は径36×40cm・深さ45cm、P_{13}は径40×55cm・深さ29.5cm、P_{14}は径18×26cm・深さ29.5cm、P_{15}は径24×28cm・深さ13.5cm、P_{16}は径34×57cm・深さ21.5cm、P_{17}は径27×29cm・深さ15.5cm、P_{18}は径85×132cm・深さ31cmを測る。炉は住居址のほぼ中央で検出された。残存する炉石は3個だけだが、方形か円形の石囲炉と考えられる。残存状態は悪く、耕作土が炉床まで侵入している部分もあった。

本住居址からは縄文時代中期末葉から後期初頭の土器が出土している。出土量は少なく、全容の窺えるものは皆無であり、全てが細片である。石器は、石鏃・石錐・打製石斧・スクレパー・フレイク・敲石・ストーンリタッチャー・砥石・多目的石器・石核等が出土し、33点を図示した。なお、詳細は第9～11表を参照されたい。土器は称名寺式土器（25－3～10）を主体とするが、微隆起帯により文様区画を構成する加曽利EⅣ式（25－1・2）・口縁部内側に沈線を巡らせた堀之内式（25－11・12）も出土しており、新旧の両要素が混在する。称名寺式土器は磨消縄文構成を採り、充塡された縄文の縄の撚り方向はLRが優勢である。25－3は深鉢土器の波頂部破片であり、橋状の把手が貼付されていたものと推察される。出土土器の色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成はやや脆弱である。胎土には白色粒子の混入される傾向がある。

以上より本住居址の所産期は、縄文時代中期末葉から後期初頭に位置づけられる。



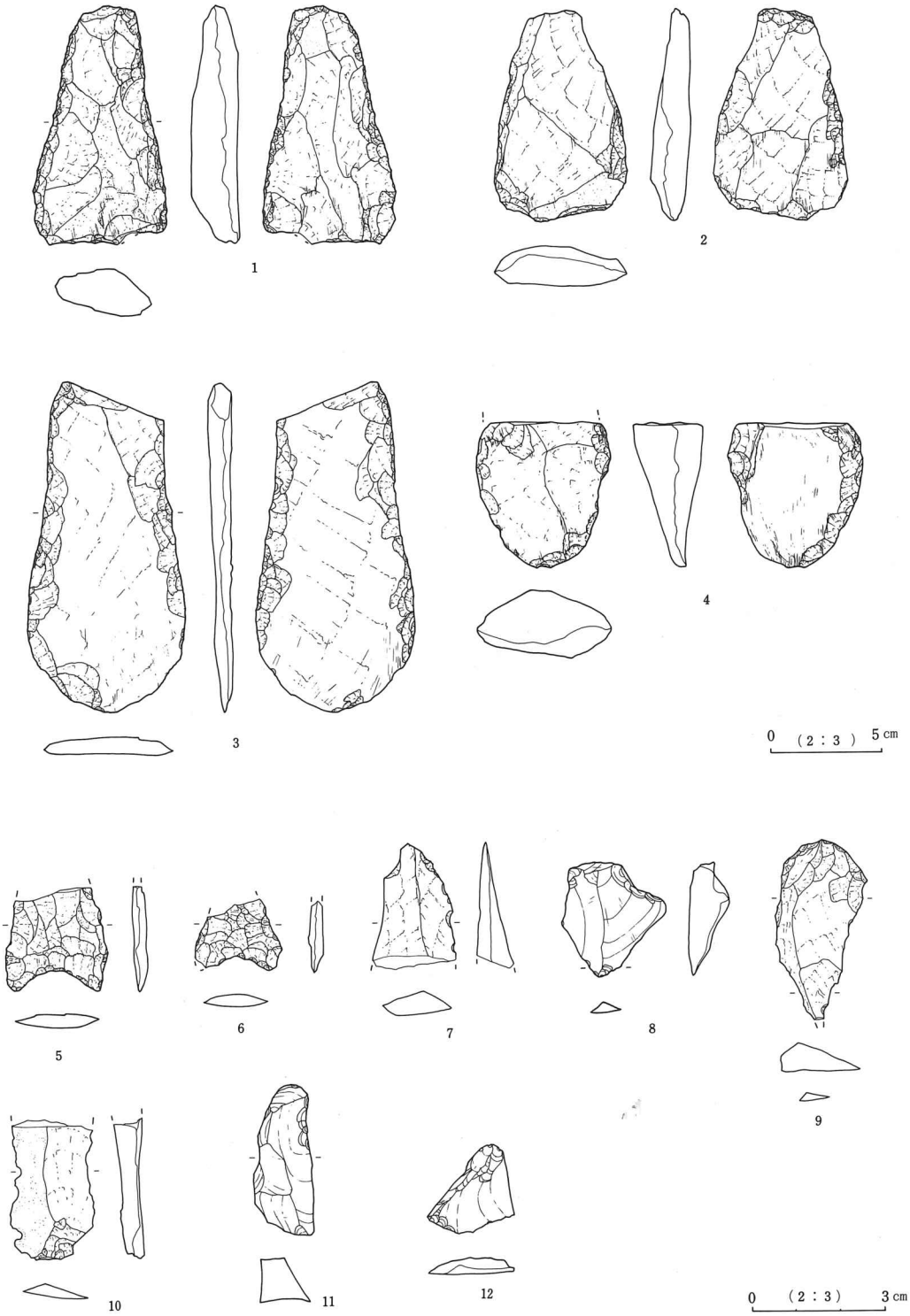
第25図　第４号住居址出土土器実測図

第８表　第４号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器　種	部　位	器　形・文　様・施文順序	時　期	備　考
25－１	深　鉢	胴　部	微隆起帯による文様区画を構成。	中期末葉～後期初頭	白色粒子を多量に含む。
25－２	〃	〃	〃	〃	〃
25－３	〃	把　手	橋状？把手を有する。磨消縄文構成。沈線区画→ＬＲ縄文縦位回転施文による区画内充塡→器面調整。	後期初頭 称名寺式	精緻なつくりを呈する。
25－４	〃	口縁部	口唇部内側に肥厚。磨消縄文構成。ＬＲ縄文横位回転施文。	〃	内外面炭化物付着。⌀５㎜内外の白色粒子を多量に含む。
25－５	〃？	〃	波状口縁。口縁部内側に肥厚。	〃	精緻なつくりを呈する。
25－６	深　鉢	胴　部	磨消縄文構成。沈線区画→ＬＲ縄文区画内充塡→器面調整。	〃	⌀0.5㎜内外の白色粒子を含む。
25－７	〃	〃	磨消縄文構成。沈線区画→Ｌ縄文縦位回転施文による区画内充塡→器面調整。	中期末葉～後期初頭	
25－８	〃	〃	磨消縄文構成。Ｌ縄文縦位回転施文→沈線区画→ミガキ。	〃	
25－９	〃？	〃	斜位の沈線文が１条看取される。	後期初頭	
25－10	〃	底　部	「Ｕ」字状沈線による区画文様を構成。	〃 称名寺式	⌀0.5㎜内外の白色粒子を多量に含む。外面黒色塗彩。
25－11	〃？	口縁部	口縁部内側に肥厚し，沈線が１条巡る。	後期初頭 堀之内式？	砂粒を含む。
25－12	〃	〃	〃	〃	〃
25－13	〃	胴　部	ＬＲ縄文横位回転施文。	後期初頭 ？	
25－14	〃	〃	無文。	〃	外面黒色塗彩。石英状粒子を多量に含む。
25－15	〃	〃	〃	〃	砂粒を多量に含む。
25－16	〃	〃	〃	〃	⌀0.5㎜内外の白色粒子を含む。
25－17	〃	〃	〃	〃	⌀１㎜内外の白色粒子を多量に含む。
25－18	〃	底　部		〃	細砂粒を多量に含む。

第９表　第４号住居址出土石器一覧表(1)

挿図番号	器　種	石　質	法量 cm 長さ	巾	厚さ	備　考
26－１	打製石斧	玄武岩	10.7	6.0	2.2	
26－２	打製石斧	玄武岩	9.5	6.0	1.8	
26－３	打製石斧	安山岩	14.8	7.1	1.1	
26－４	打製石斧	玄武岩	6.4	6.1	3.1	
26－５	石　鏃	玄武岩	〈2.3〉	2.3	0.4	凹基
26－６	石　鏃	玄武岩	〈1.6〉	〈2.0〉	〈0.3	凹基
26－７	石　鏃	玄武岩	2.8	1.8	0.8	未成品、剥離調整段階
26－８	石　錐	黒曜石	2.6	2.4	0.9	スクレパーの可能性有
26－９	石　錐	玄武岩	〈4.0〉	2.0	0.7	
26－10	フレイク	玄武岩	3.2	1.9	0.6	一辺を刃部として使用
26－11	スクレパー	黒曜岩	3.4	1.3	1.0	二辺に刃部を形成
26－12	フレイク	黒曜岩	2.0	2.0	0.3	一辺を刃部として使用、使用剥離痕有
27－13	砥　石	安山岩	5.4	6.1	2.1	二面使用



第26図　第４号住居址出土石器実測図(1)

第27図　第４号住居址出土石器実測図(2)

第10表　第４号住居址出土石器一覧表(2)

挿図番号	器種	石質	法量 cm			備考
			長さ	巾	厚さ	
27－14	砥石	安山岩	5.8	4.0	1.7	二面使用
27－15	砥石	安山岩	4.3	3.3	0.9	二面使用
27－16	砥石	砂石	4.9	3.7	1.2	二面使用
27－17	砥石	砂質凝灰石	4.5	4.4	1.6	二面使用
27－18	砥石	安山岩	9.2	5.4	1.6	二面使用
27－19	多目的石器	安山岩	7.5	4.4	1.7	砥石(二面使用)、敲石

第11表　第４号住居址出土石器一覧表(3)

挿図番号	器種	石質	法量 cm			備考
			長さ	巾	厚さ	
27－20	ストーンリタッチャー	安山岩	〈5.9〉	7.5	2.4	鼠歯状痕有
27－21	敲石	安山岩	〈7.0〉	〈4.5〉	〈3.3〉	敲打痕有
27－22	多目的石器	安山岩	11.7	3.2	〈1.3〉	砥石・敲石
27－23	敲石	玄武岩	7.3	5.6	3.5	石核利用
27－24	石錐	玄武岩	〈3.8〉	1.6	0.9	
27－25	石錐	玄武岩	5.7	2.8	1.8	一辺を削器として使用
27－26	スクレパー	玄武岩	4.2	3.3	1.3	二辺に刃部を形成
27－27	スクレパー	玄武岩	5.4	3.8	1.3	使用剝離痕有
27－28	スクレパー	チャート	4.8	3.3	1.0	使用磨耗痕・剝離痕有
27－29	スクレパー	玄武岩	4.5	2.3	1.0	使用磨耗痕有
27－30	スクレパー	玄武岩	4.45	2.8	1.5	一辺に刃部を形成
27－31	フレイク	玄武岩	4.4	2.3	0.9	一辺を刃部として使用
27－32	フレイク	玄武岩	4.4	2.6	0.7	一辺を刃部として使用
27－33	スクレパー	玄武岩	3.4	2.5	0.8	一辺に刃部を形成

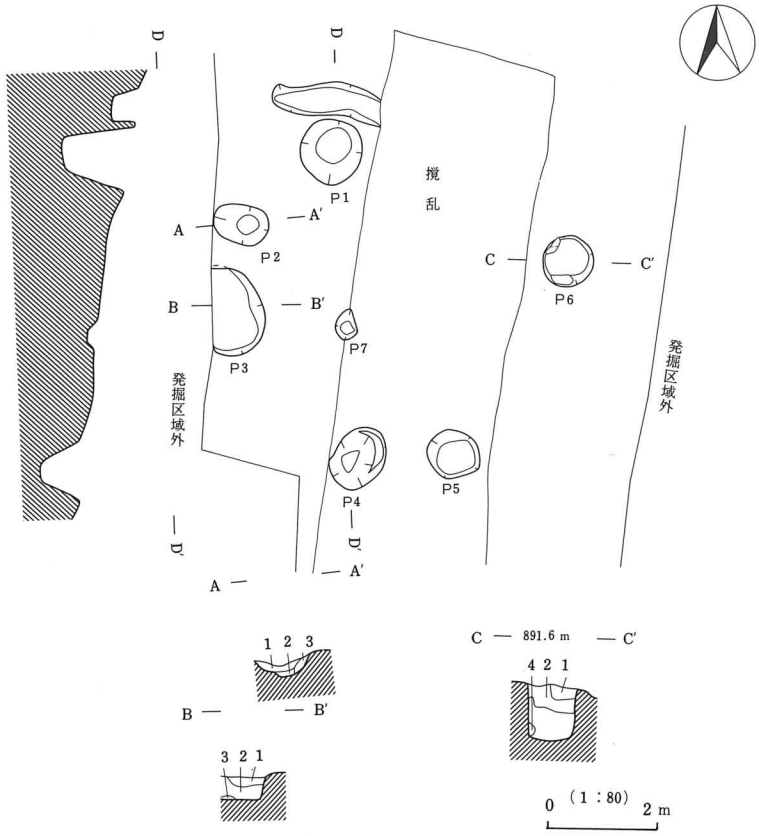
5）第５号住居址

第５号住居址は、調査区北側、あ・いー６・７グリッド内において検出され、中央部を撹乱により破壊される。

平面形態はピットの在り方から円形を呈すると推考される。ピットは７個が検出された。P_1は径65×70cm・深さ82cm、P_2は径42×60cm・深さ26cm、P_3は径95cm・深さ48cm、P_4は径54×70cm・深さ41cm、P_5は径50×60cm・深さ27cm、P_6は径54cm・深さ63cmを測る。なお炉は検出されなかった。

本住居址からは縄文時代中期末葉から後期初頭の土器が出土している。出土量は少なく全てが細片である。石器はフレイク数点のみで図示は控えた。土器は称名寺式土器（29－２～４、７・８）を主体とし、器種には深鉢（１～４・７・９・10・11）・注口（29－８）が観られる。胎土には白色粒が混入され脆弱である。色調は橙色（7.5YR７／６）を呈し、軽質であるものが主体を占める。

以上より本住居址の所産期は、縄文時代中期末葉から後期初頭に位置づけられる。

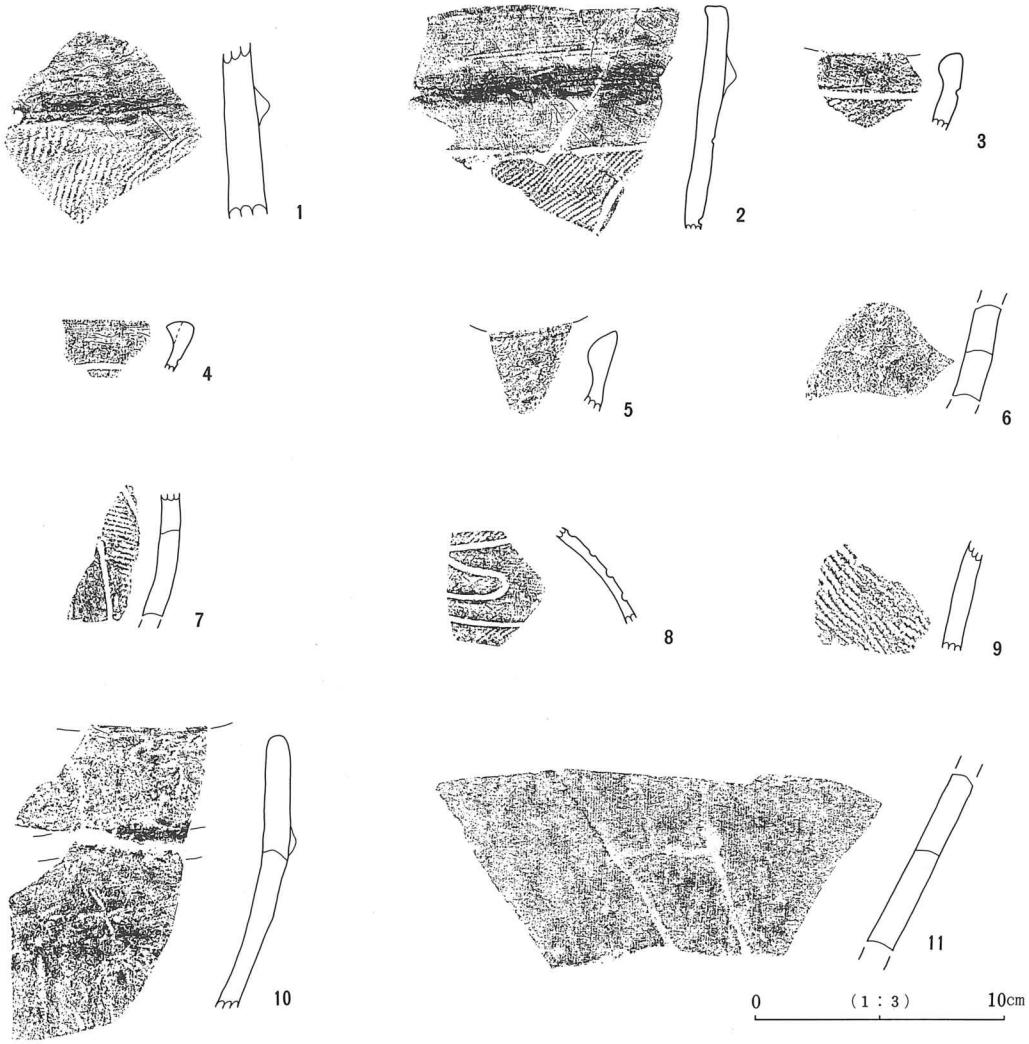


P 2 セクション
1　黒褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子・焼土粒子を微量、パミス中粒を少量含む。7.5YR3/2
2　黄褐色土層　粘性弱し。ローム主体。炭化粒子・パミス中粒を少量含む。10YR5/6
3　褐色土層　粘性弱し。ローム粒子・パミス中粒を少量含む。10YR4/6
P 3 セクション
1　褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子・パミス中粒を少量含む。10YR4/4
2　褐色土層　粘性やや弱し。ローム主体。パミス中粒を少量、炭化粒子を微量含む。7.5YR4/4
3　黒褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子を微量含む。10YR3/2
P 6 セクション
1　褐色土層　粘性弱し。ローム主体。パミス極小粒・スコリア・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。7.5YR4/4
2　暗褐色土層　粘性弱し。パミス極小粒・スコリア・ローム粒子を微量含む。7.5YR3/3
3　極暗褐色海層　粘性やや弱し。パミス極小粒・スコリア・ローム粒子を微量含む。7.5YR2/3
4　明褐色土層　粘性弱し。ローム主体。パミス極小粒・スコリアを微量含む。7.5YR5/6

第28図　第５号住居址実測図

第12表　第５号住居址出土土器一覧表(1)

挿図番号	器　種	部　位	器　形・文　様・施文順序	時　期	備　考
29－1	深　鉢	胴　部	断面三角形の隆起帯により文構帯を区画。上無文、下Ｌ縄文斜位回転施文。	中期末葉～後期初頭	∅１㎜内外の白色粒子を含む。
29－2	〃	口縁部	口縁部直下に断面三角形の隆起帯を巡らし、磨消縄文構成をとる。沈線区画→ＬＲ縄文横位回転施文による区画内充填→器面調整。	後期初頭 称名寺式	
29－3	〃	〃	口縁部内側に肥厚。磨消縄文構成。ＲＬ？縄文施文→沈線区画。	〃	砂粒を多量に含む。



第29図　第５号住居址出土土器実測図

第13表　第５号住居址出土土器一覧表(2)

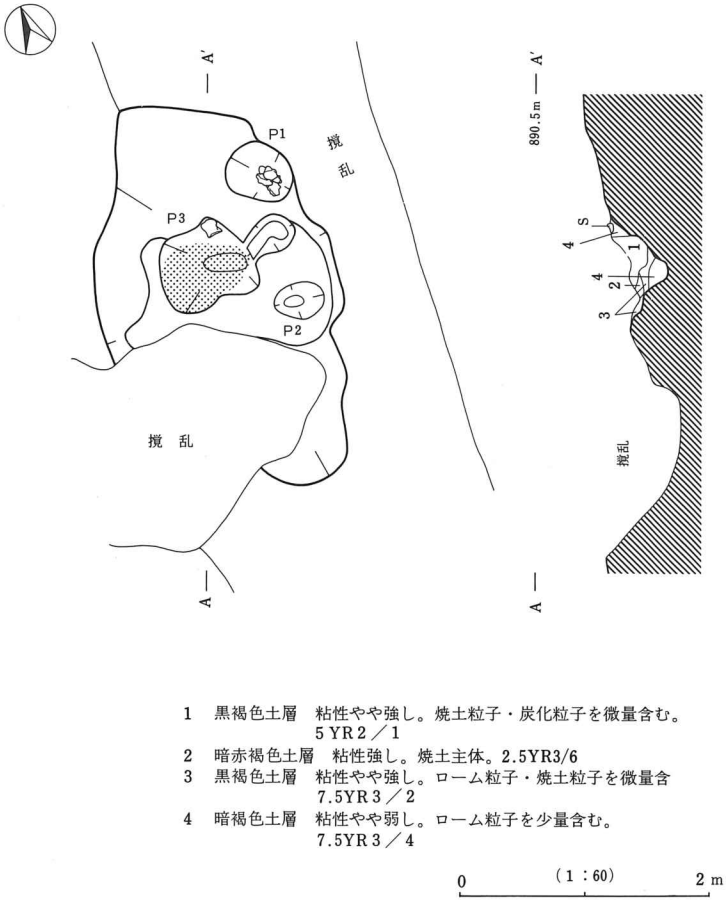
挿図番号	器　種	部　位	器　形・文　様・施文順序	時　期	備　考
29－4	深　鉢	口縁部	口縁部内側肥厚。磨消縄文構成。ＲＬ縄文横位回転施文。	後期初頭 称名寺式	精緻なつくりを呈する。
29－5	〃？	〃	波状口縁。口縁部内側に肥厚。無文。	〃？	外面赤色塗彩。
29－6	深　鉢	胴　部	無文。	〃	∅１㎜内外の白色粒子を多量に含む。
29－7	〃	〃	磨消縄文構成。Ｌ縄文斜位回転施文。	〃	
29－8	注　口	〃	磨消縄文構成。ＲＬ縄文縦位回転施文→沈線区画。	〃	外面黒色塗彩。
29－9	深　鉢	〃	ＬＲ縄文縦位回転施文。	〃？	砂粒を多量に含む。

第14表　第５号住居址出土土器一覧表(3)

挿図番号	器　種	部　位	器　形・文　様・施文順序	時　期	備　考
29－10	深　鉢	口縁部	断面「カマボコ」状を呈する隆帯が横走する。	後期初頭 称名寺式?	外面炭化物が多量に付着。 ⌀1mm内外の白色粒子を多量に含む
29－11	〃	胴　部	無文。	〃	⌀0.5mm内外の白色粒子を含む。

2　土坑

1）第１号土坑



第30図　第１号土坑実測図

第１号土坑は、調査区中央、い－５グリッド内において検出され、南西部を撹乱により破壊される。

平面形態は、南北320cm（現存値）・東西193cmを測り、南北に長い不整楕円形を呈する。ピットは３個が検出された。P_1は径46×54cm・深さ25.5cm、P_2は径29×40cm・深さ18cm、P_3は径68×72cm・深さ41cmを測る。なお、P_3は焼土が確認された。

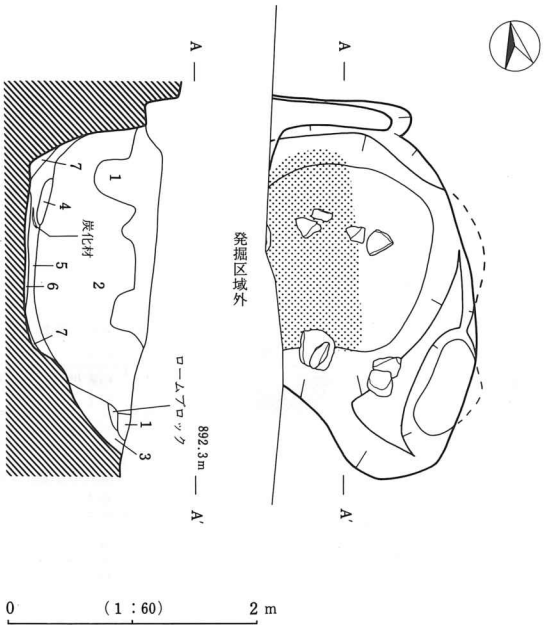
本土坑は、P_3を炉として考えた場合、炉を伴う土坑として性格を与える事ができる。また全体の規模を考えると、本土坑全体をもって屋外炉という可能性もある。何れにしても焼土を伴う特殊な土坑と考えられ、炉としても他の目的であったとしても非常に興味深い。今後の類例と研究を待ちたい。

本土坑からは、縄文時代後期初頭の土器と、安山岩製の打製石斧（34－１）・玄武岩のフレイ

クが出土している。土器（32－１～４、６）は全て称名寺式土器の深鉢の破片と考えられる。また、32－３は口縁部の破片で、他は全て胴部の破片である。

以上より本土坑の所産期は、縄文時代後期初頭に位置づけられるが、周囲の状況より、第２号から第５号住居址と併行関係にあると考えられる。

２）第２号土坑



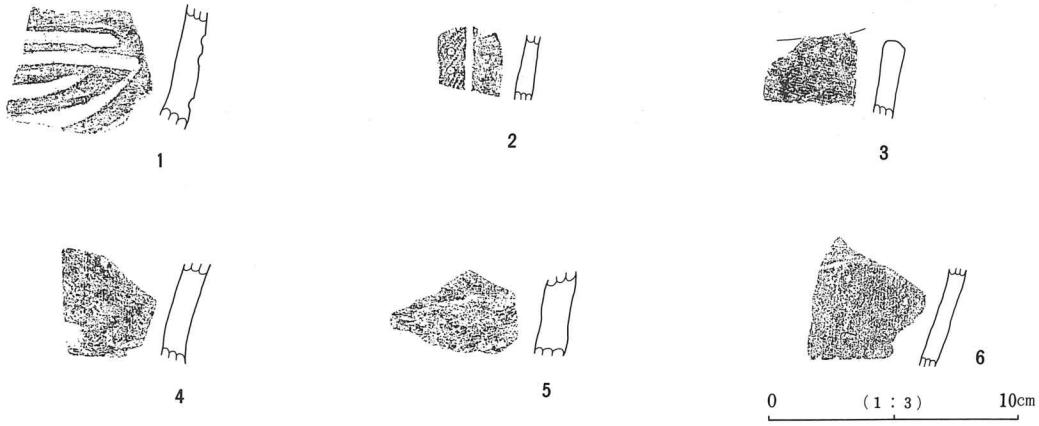
1　暗褐色土層　粘性弱し。パミス極小・炭化粒子を微量含む。10YR3/3
2　褐色土層　粘性弱し。パミス中粒と炭化粒子を少量、ローム粒子を多量含む。7.5YR4/4
3　黒褐色土層　粘性弱し。パミス中粒を少量、ローム粒子を微量含む。10YR2/3
4　黄褐色土層　粘性弱し。ローム主体。10YR5/8
6　黒褐色土層　粘性弱し。炭化材・炭化粒子主体。10YR3/1
7　褐色土層　粘性弱し。焼土主体。7.5YR4/6

第31図　第２号土坑実測図

第２号土坑は、調査区北側、い－７・８グリッド内において検出された。

平面形態は、突出部を持つ隅丸方形を呈すると考えられる。規模は南北で240cm（突出部を含めて312cm）を測る。底面近くの第６層は炭化材と炭化粒子が主体の層で、壁際には第７層の焼土が確認された。また覆土中からは現代の遺物が出土している事より、近現代の炭焼窯と認識した。また混入遺物として縄文時代後期初頭の称名寺式土器深鉢胴部片（32－５）と、チャート製のスクレパー（34－２）が出土している。

以上より本土坑の所産期は、近現代と考えられる。



第32図　土坑出土土器

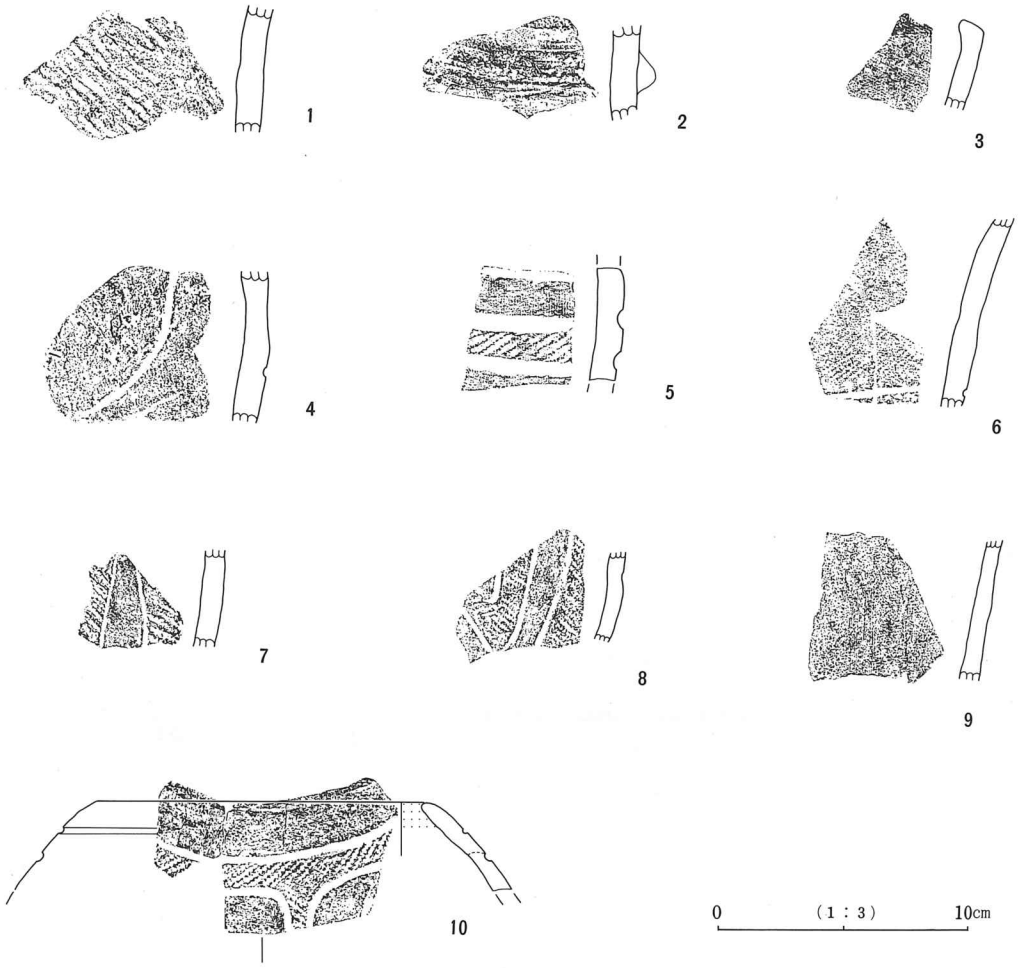
第15表　土坑出土土器一覧表

挿図番号	器　種	部　位	器　形・文　様・施文順序	時　期	備　考
32－1	深　鉢	胴　部	弧状に太い沈線文を描く。	後期初頭 称名寺式?	砂粒を多量に含む。 D1
32－2	〃	〃	磨消縄文構成。RL縄文縦位回転施文→沈線区画。円形刺突文配列。	〃	精緻なつくりを呈する。 D1
32－3	〃	口縁部	無文。	〃	⌀1mm内外の白色粒子を多量に含む。D1
32－4	〃	胴　部	〃	〃	砂粒を多量に含む。 D1
32－5	〃	〃	〃	〃	〃 D2
32－6	〃	〃	〃	〃	石英状粒子少量含む。 D1

3　遺構外及びトレンチ

トレンチは遺構の確認を行うために合計9本を掘り下げた。この内遺構を検出したトレンチは1・2・5・7号トレンチである。なお8・9号トレンチから遺物は出土したが遺構は確認されなかった。

遺構外及びトレンチからは縄文時代中期末葉（33－1・2）から後期初頭（33－3～10）の土器が出土している。全て細片であり、出土量は少量である。33－10は外面及び口縁部内側に赤色塗彩の施された土器である。石器は、打製石斧・石錐・スクレパー・多孔石・フレイクが出土し、5点を図示した。



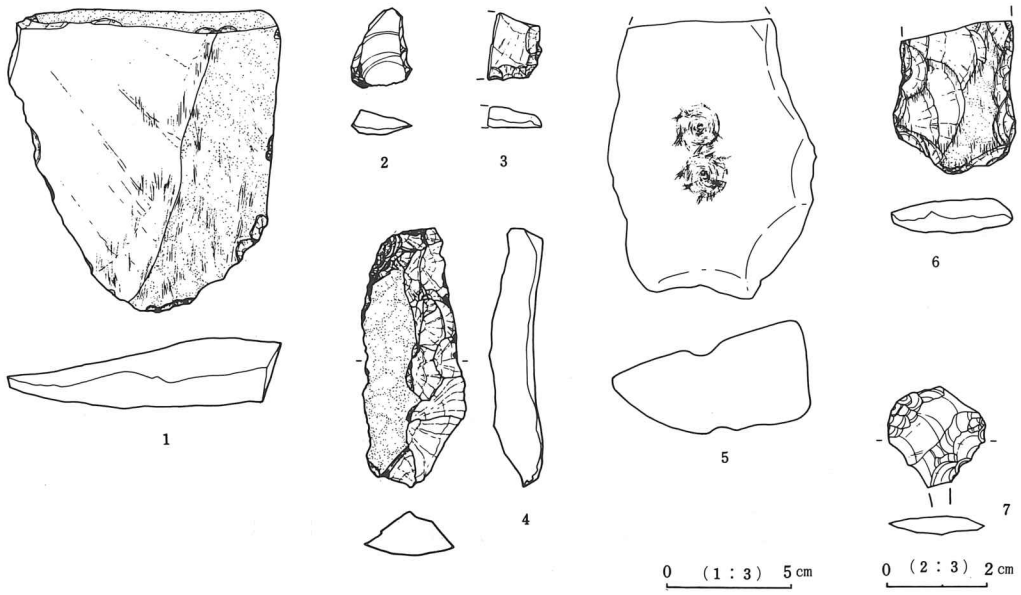
第33図　遺構外及びトレンチ出土土器実測図

第16表　遺構外及びトレンチ出土土器一覧表(1)

挿図番号	器　種	部　位	器　形・文　様・施文順序	時　期	備　考
33－1	深　鉢	胴　部	粗いＬＲ縄文横位回転施文。	中期末葉～後期初頭	砂粒を多量に含む。 第２号トレンチ
33－2	〃	〃	太い隆帯を横位に貼付。	〃	∅１㎜内外の白色粒子を含む。 第９号トレンチ
33－3	〃	口縁部	口縁部内折。無文。	後期初頭	〃
33－4	〃 ?	胴　部	弧状に沈線を描く。	後期初頭 称名寺式	∅１㎜内外の白色粒子を多量に含む。表採。
33－5	〃	〃	磨消縄文構成。沈線区画→ＬＲ縄文横位回転施文による区画内充填→器面調整。	〃	石英状細粒子を多量に含む。 第９号トレンチ
33－6	〃	〃	磨消縄文構成？。ＬＲ縄文横位回転施文帯＋沈線区画により文様を構成。	〃	∅１㎜内外の白色粒子を含む。 表採。
33－7	〃	〃	磨消縄文構成。沈線区画→ＲＬ縄文縦位回転施文による区画内充填。	中期末葉～後期初頭	石英状粒子を含む。 第９号トレンチ
33－8	〃	〃	磨消縄文構成。「Ｖ」字状沈線区画→ＬＲ縄文縦・横位回転による区画内充填→器面調整。	後期初頭 称名寺式	∅0.5㎜内外の白色粒子を含む。表採。

第17表　遺構外及びトレンチ出土土器一覧表(2)

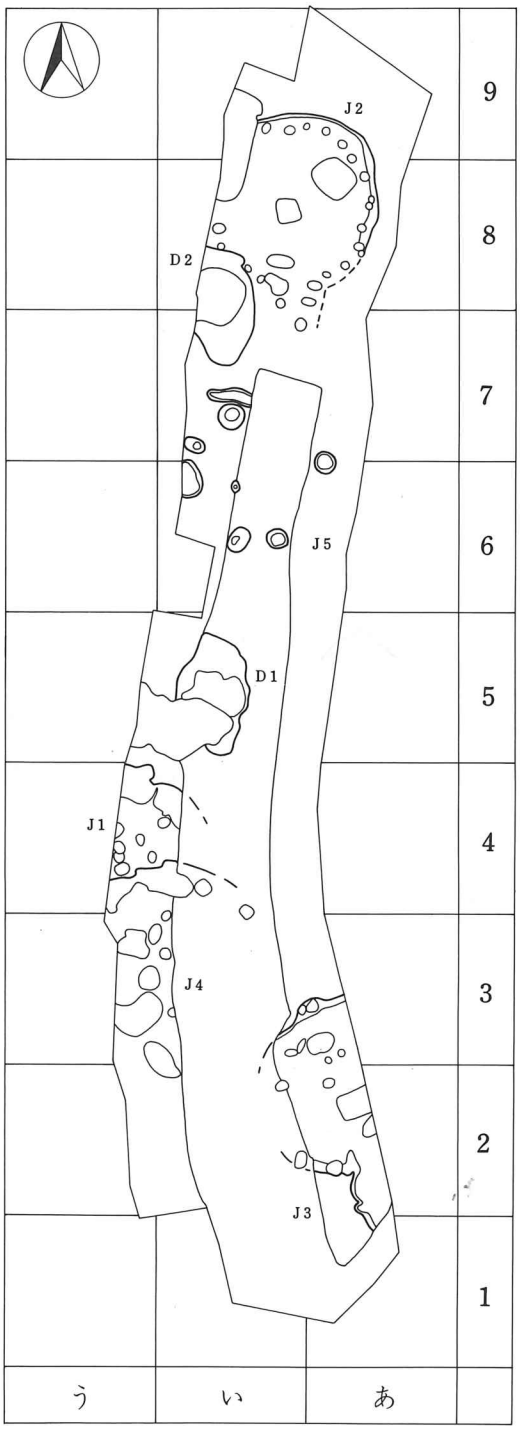
挿図番号	器　種	部　位	器　形・文　様・施文順序	時　期	備　考
33－9	深　鉢	胴　部	無文。	後期初頭	石英状粒子を多量に含む。第9号トレンチ。
33－10	浅　鉢	口縁部	磨消縄文構成。沈線区画→LR縄文縦・横位回転施文による区画内充填→器面調整。	〃 称名寺式?	外面から口縁部内面まで赤色塗彩。砂粒を多量に含む。



第34図　土坑・遺構外及びトレンチ出土石器実測図

第18表　土　坑・遺構外及びトレンチ出土石器一覧表

挿図番号	器　種	石　質	法量 cm 長さ	巾	厚さ	出土地点	備　考
34－1	打製石斧	安山岩	12.0	10.8	〈2.7〉	D1	粗製、使用擦過痕有
34－2	スクレパー	チャート	3.1	2.4	1.0	D2	一辺に刃部形成
34－3	スクレパー	玄武岩	〈2.3〉	〈2.6〉	〈0.9〉	9トレ	一辺に刃部形成
34－4	スクレパー	玄武岩	10.3	4.1	1.9	9トレ	二辺に刃部形成
34－5	多孔石	安山岩	11.1	7.8	4.0	2トレ	凹4個
34－6	打製石斧	安山岩	〈6.0〉	4.9	1.5	2トレ	使用擦過痕有
34－7	石　錐	黒曜石	〈2.0〉	1.9	0.4	表採	



第35図　鶉ヲネ遺跡全体図（1：200）

第Ⅳ章　総括

鶉ヲネ遺跡は、縄文時代中期から後期にかけての集落址である。今回の調査は、台地（尾根）の中央を走る道路の拡巾工事に伴うもので、調査区は巾1.5m～２mで南北に細長く、全て人力による調査であった。また、念のため一部アスファルトと敷砂利を剝いだ結果、遺構が現道の下に残っている事が確認され、現道を全面剝ぎ取った。

調査の結果、縄文時代中期末頃の竪穴住居址１軒（Ｊ１号）、同じく中期末から後期初頭にかけての敷石住居址１軒（Ｊ２号）・竪穴住居址３軒（Ｊ３～５号）、縄文時代後期初頭の特殊土坑１基（Ｄ１号）、近現代の炭焼窯１基が検出された。

Ｊ２号からＪ５号住居址は、加曽利ＥⅣ式から称名寺式にかけての遺構で、称名寺式の深鉢・注口土器を中心に出土している。土器様相から、後期の初頭に所産期の中心を持って行けそうである。このＪ２号からＪ５号までの４軒とＤ１は併行関係にあり、同一期の集落の一部と考えられる。この後期初頭の集落は、本調査区の東西にまだ広がっていると考えられる。また中期の集落は本調査区より西側に展開すると予想される。

鶉ヲネ遺跡より出土した石器（コア・フレイク・チップを含む）の84パーセントは玄武岩で、次いで安山岩、チャート、黒曜石の順である。この玄武岩は、本遺跡南側を流れる香坂川の河床や河原、東側の県境付近の谷沿いに転石として多量に存在する。また細かく踏査すれば露頭も数多く発見できるだろうと考えられる。安山岩は、平尾山・閼伽流山・森泉山系産の輝石安山岩である。本遺跡出土の輝石安山岩は、風化状態で灰色、割断面が黒灰色の良質のものである。なお、Ｊ２号住居址の配石に利用された輝石安山岩は、同山系産だが悪質で割断面も灰色である。また同山系産の安山岩と考えられるが、輝石を肉眼で観察できないものがある。風化状態で灰色か灰褐色、割断面が黒灰色で、前述の輝石安山岩よりは鋭い割れ口を示し、八風山系玄武岩に近い安山岩が数点確認された。この安山岩は他と区別するために、ここでは玄武岩質安山岩と仮称したい。また八風山系産玄武岩は以下玄武岩と呼ばせていただく。

玄武岩は、手で持つスクレパーと指で持つスクレパーを中心に、打製石斧・石鏃・石錐に利用される。輝石安山岩は、主に打製石斧に、希ではあるが手で持つスクレパーに利用される。玄武岩質安山岩は出土量が少なく明確に言えないが、打製石斧と手で持つスクレパーに利用されると考えられる。チャートと黒曜石は、石鏃と石錐・指で持つスクレパーが主で、希に手で持つスクレパーに利用される。玄武岩はほとんどの種類の石器に利用され、三つの種類の石が共存する石鏃と石錐に至っても、その中心となっている。原産地が近いとはいえ、いかに万能であったかが

窺えよう。

次に、玄武岩・輝石安山岩・玄武岩質安山岩を原材とした石器について若干の考察を行いたい。

打製石斧に利用される輝石安山岩は、扁平柱状で産するものが普通で、両面或いは片面に原石面を残すものが多い。また玄武岩・玄武岩質安山岩は、円礫・角礫で産するものが主で、原石より打ち出された大形剝片と、剝片を打ち出した後の芯を使うものが多い。この製作方法の違いは、原材の固さの差であろうが、製作の容易さという点で輝石安山岩製の打製石斧が多いと考えられる。形態では、撥形・短冊形・分銅形という分類を今回はあえてはずし、刃部のみで分けた。それによると、輝石安山岩では円刃を、玄武岩・玄武岩質安山岩では直刃を呈する場合が多い。これは単純に石材の性質による刃部形態の差とも考えられるが、石材の性質による使用目的の差とも考えられよう。その差は製品の欠損状態にも現れている。輝石安山岩製の多くのものが製品中央で切損しているのに対し、玄武岩・玄武岩質安山岩は刃部を中心に細かく欠損している。もちろんこれは石材の強度による差かもしれないが、同様に使用目的の差と考えられないわけでもない。次に使用目的だが、いくつか推測できる。「土を掘る」(遺構を掘る、植物の根を採集する等)、「木を伐採する」、「木を切断する」といった目的である。今回の調査や周辺部の調査でも磨製石斧が出土していない。そのため、玄武岩・玄武岩質安山岩製直刃のものが木の切断・伐採、輝石安山岩製円刃のものが土を掘るのに適していたろうと推測もできる。しかし、前述した三つの目的において使用された万能な大道具であると留めておいた方が現時点ではいいのかもしれない。

スクレパーは多種多様で、定形化している横刃型石器や石匙以外、性格を与えるのは困難であるが、玄武岩との関係は避けられぬものがある。今回は敢えて考察を試みたい。

横刃型石器については次の様に認識した。主として横長剝片・翼状剝片を利用し、長辺の一辺に直刃を、反対の辺に背を持つもので、刃部角度が鋭角なものである。植物採集が主たる目的で、直刃という事より、木材加工も考えられる。また石匙は様々な形態を呈するが、原則として摘み状の突出部を持つ。使用目的は私論を試みた。なぜ突出部があるのか、言い代えれば、なぜ突出部が必要なのかが問題になろう。それは携帯用だったからと考えられる。つまり、突出部に紐を絡める事により携帯し易くしたのではないだろうか。後述するが、入念に剝離調整を行ったスクレパーがある。これに突出部を付ければ石匙になり得る。このスクレパーに対し、石匙には携帯用の万能利器としての性格が与えられるように思う。そう考えると、石匙の形態の違いもスムーズに納得できそうである。なお、広義で、横刃型石器は手に持つスクレパー、石匙(大型粗製石匙のみ手に持つスクレパー)は指に持つスクレパーとして扱いたい。

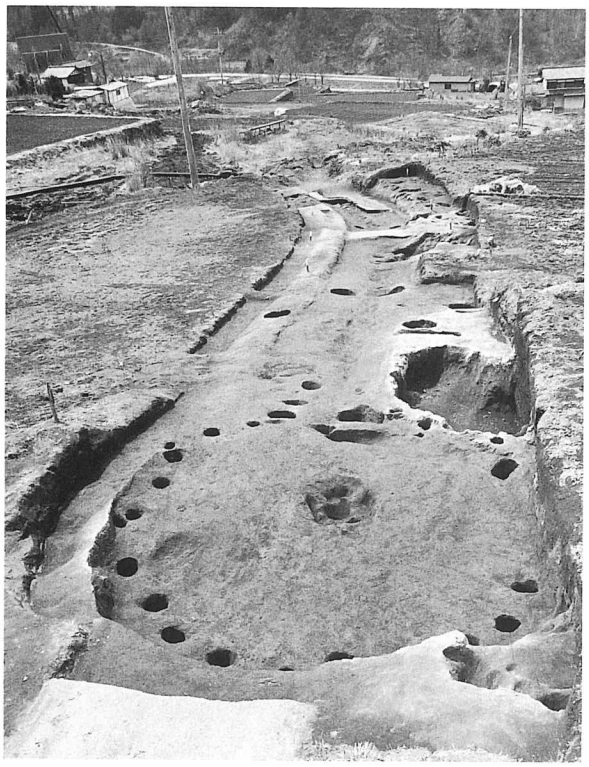
さてスクレパーであるが、「切る」、「断つ」、「削る」、「刻む」といった目的で使われた石器である事は言うまでもない。いくつかの分類方法があるが今回は、手で使用(手の平で支持)と指

で使用（指の腹で支持）と大きさから二つに大別した。さらに剥片（フレイク）そのものと刃部等に簡単な加工を行ったもの、入念に剥離整を行ったものに細分される。その内前二者が圧倒的に数量が多く量産されている。その量産は主として玄武岩に限られている。さらにその量産の理由として、使用頻度が高く、刃部がすぐに使用不能になったという事があげられる。刃部が大きく影響する作業は、やはり「削る」で、次いで「切る」、「刻む」、「断つ」であろう。植物採集に使用されたものもあるかもしれないし、肉や皮を切断したものもあるかもしれない。しかし、万能利器であるがために量産されたのではなく、木材加工具であったからこそ刃部がすぐに使用不能となったろうし、量も多かったのだろうと考えられる。森林と共存していた彼らにとって木材利用は当然であり、我々が考えるよりも多くの木製品が使われていたかもしれない。さて次の問題だが、果たして玄武岩は木材加工具に適していただろうか。それは必然的に適していたと言わざるを得ない。刃部を含めた全体の強度（木材加工を前提として）は、輝石安山岩・チャート・黒曜石よりは上だと思われる—もっとも同程度の大きさのものを比較した場合、質量が石によって違うのであるから強度を比べる事に関して問題は多い—さらに原材産地が近いという点で、玄武岩製のフレイクと簡単な加工を施したスクレパーは、木材加工具としての性格が強いと考えられる。次に入念な剥離調整を行ったものである。これは玄武岩も多い事は多いが、前述して来たものに比べ、チャートや黒曜石が増加する。形態は円形或いは楕円形を呈するものが多く、全周に刃部を持つものも少なくない。刃部は比較的鈍角で欠損も少なく、数量等踏まえた上で、肉や皮の切断・植物採集といった比較的柔らかい物に対して使用されたと思われる。なお最初に大別した指と手の違いは、行為対象である物への順応と考えられる。

さて長々と八風山系玄武岩・平尾・森泉・閼伽流山系輝石安山岩を中心に、石質と道具の関係、道具の性格について論じて来たが、まだまだ片手落ちの感がある。もう一歩踏み込み、使用痕の状態や刃部形成角度、刃部形成位置等の問題を明確にすべきであった。今回そこまで論及できなかったのは残念ではあるが、今後の課題として記して終わりとしたい。

最後に、調査に携わっていただいた方々、本稿を書くにあたり助言して下さった方々に、心より感謝の意を表し、厚くお礼申し上げます。

遠景　（南より）



全景　（北より）

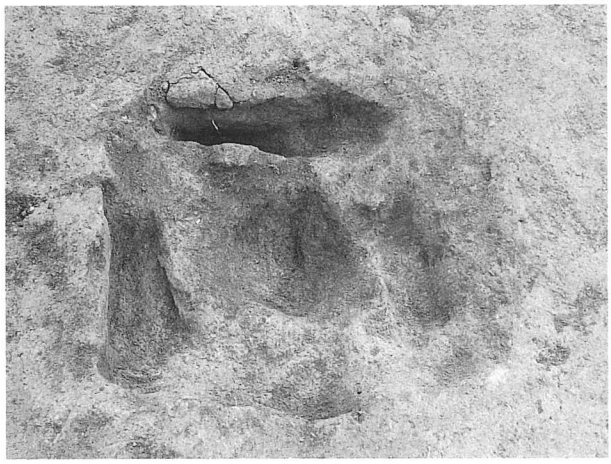
調査スナップ

Ｊ１号・Ｊ４号住居址（西より）

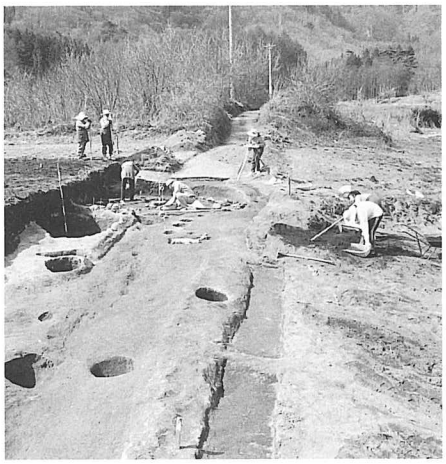
Ｊ２号住居址（東より）

Ｊ２号住居址掘方（北より）

Ｊ２号住居址炉（南より）



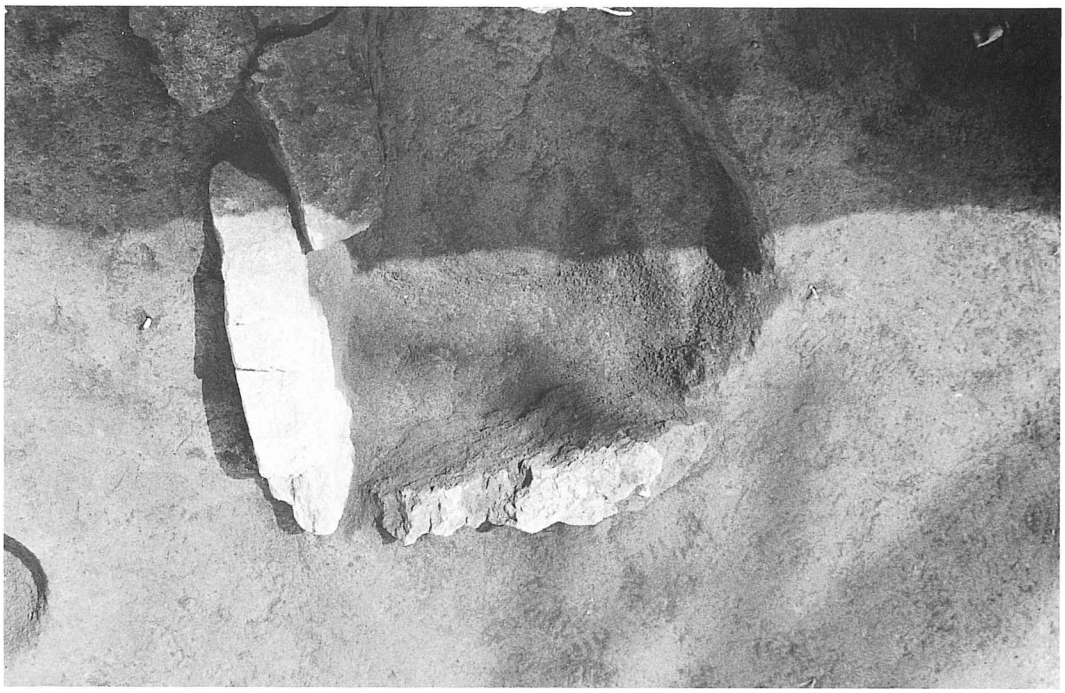
Ｊ２号住居址炉掘方（西より）



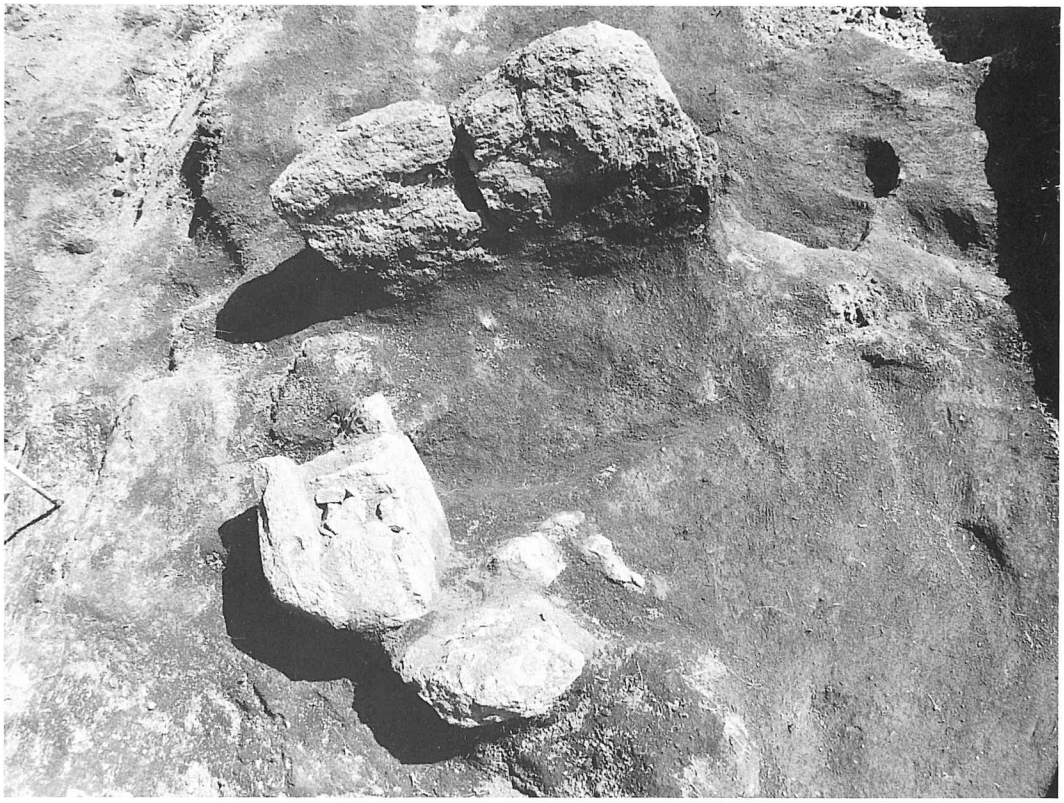
調査スナップ

Ｊ３号住居址（北より）

Ｊ３号住居址（北より）



Ｊ３号住居址炉（西より）



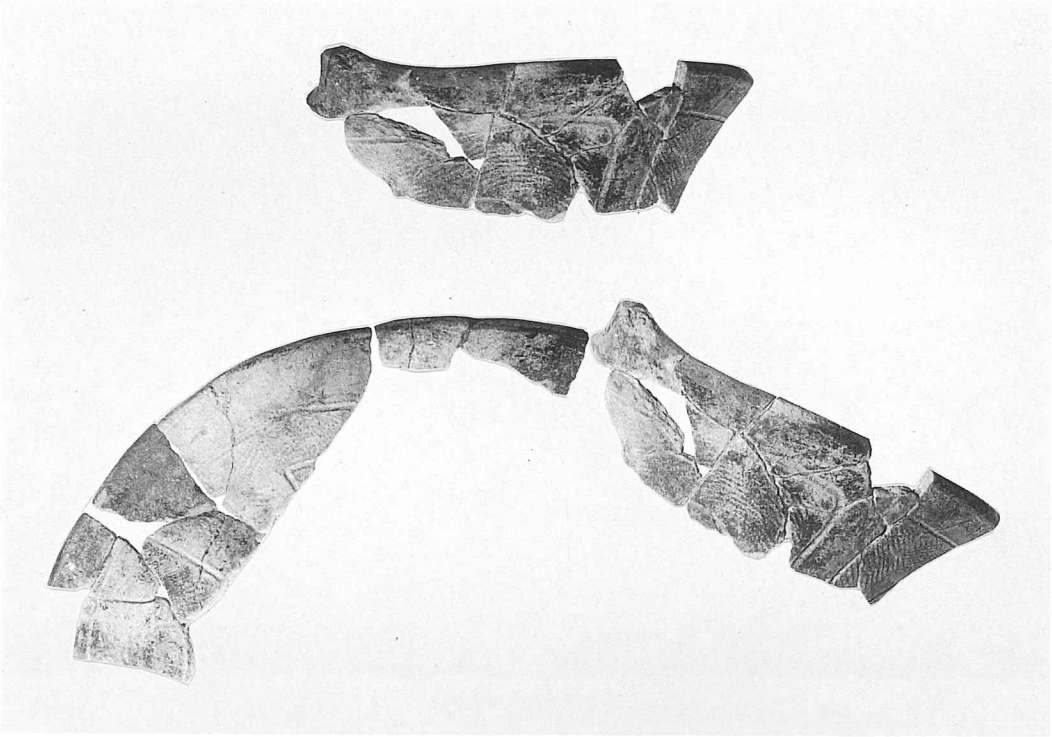
Ｊ４号住居址炉（南より）

Ｊ５号住居址（東より）

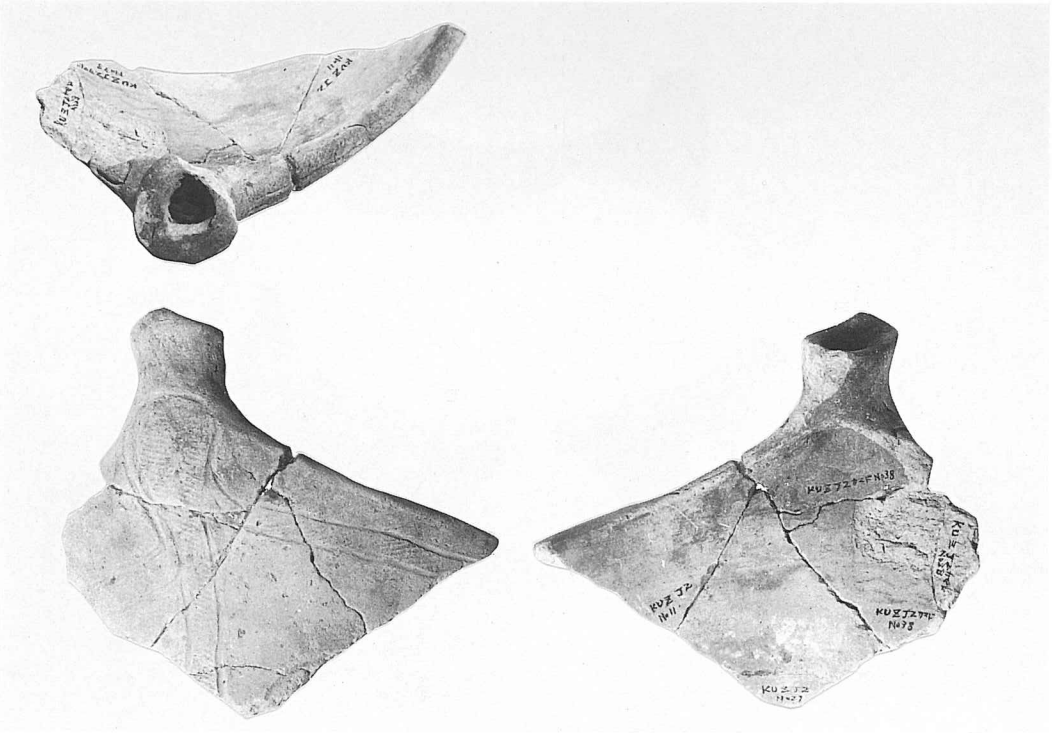
Ｄ１号土坑（東より）

Ｄ２号土坑（東より）

Ｊ２号住居址出土土器　８―１



J 2号住居址出土土器　8—4

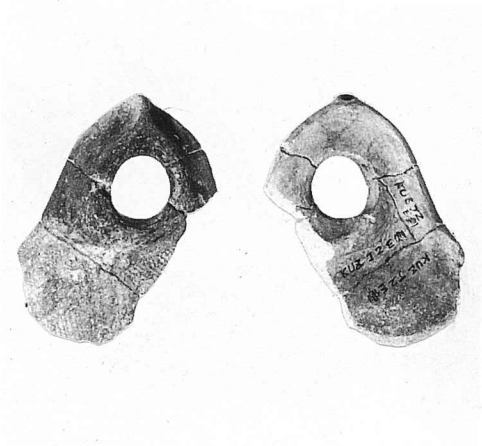


J 2号住居址出土土器　9—12

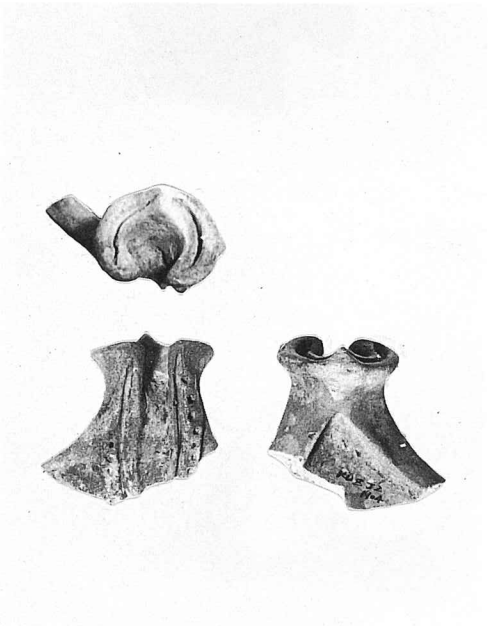
Ｊ２号住居址出土土器　８―３

Ｊ２号住居址出土土器　８―２

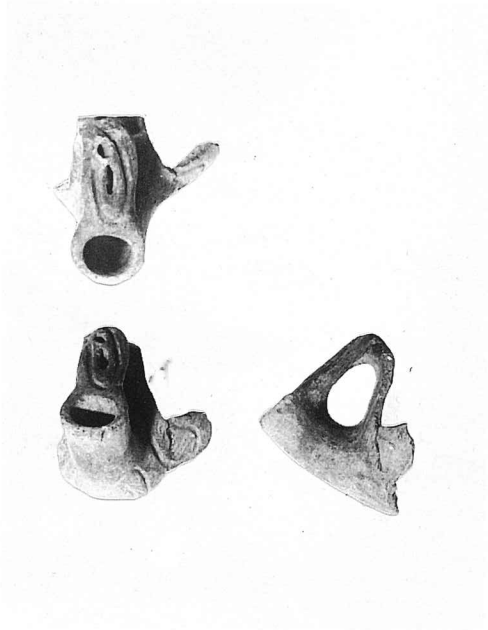
Ｊ２号住居址出土土器　９―13



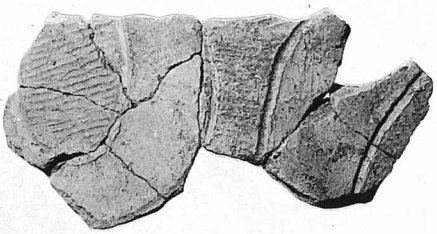
Ｊ２号住居址出土土器　９―14



Ｊ２号住居址出土土器　10―31

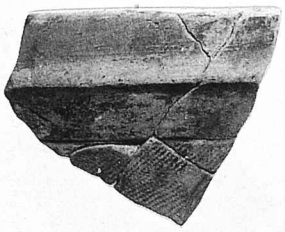


Ｊ２号住居址出土土器　11―32

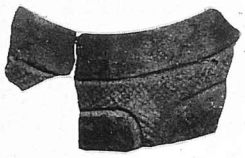


Ｊ３号住居址出土土器　19—10・11・12

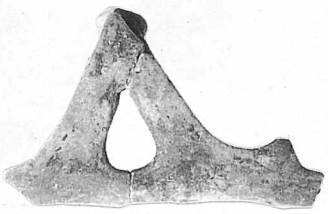
Ｊ３号住居址出土土器　20—15

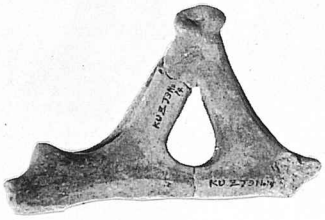


Ｊ５号住居址出土土器　29—２

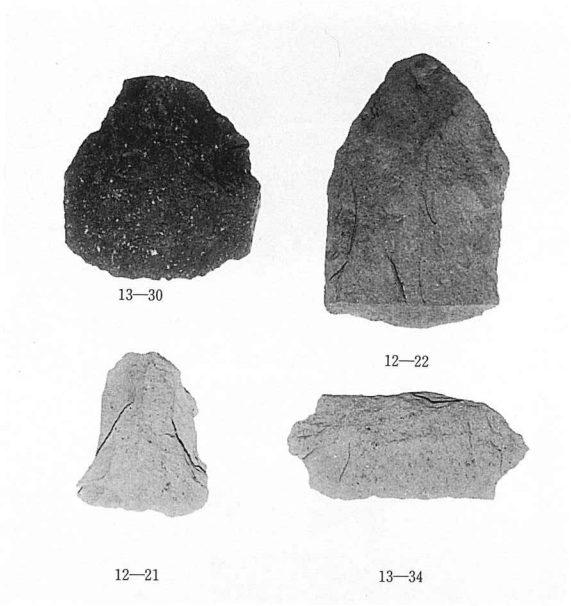


Ｊ９号トレンチ出土土器　33—10

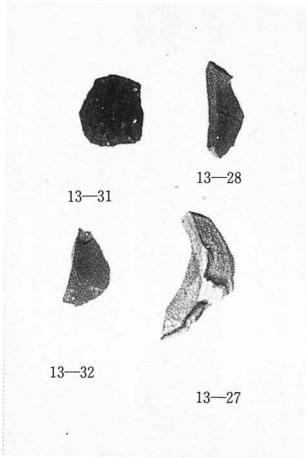




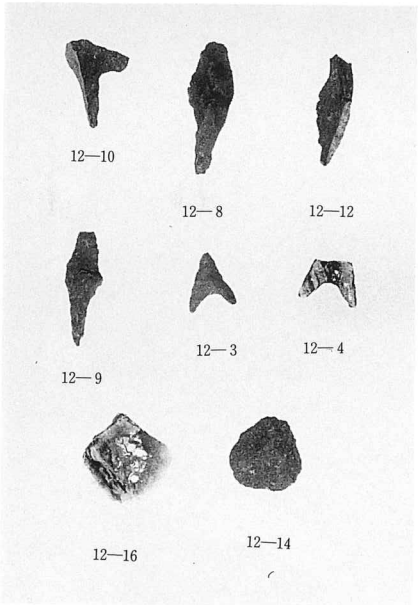
Ｊ３号住居址出土土器　21—33



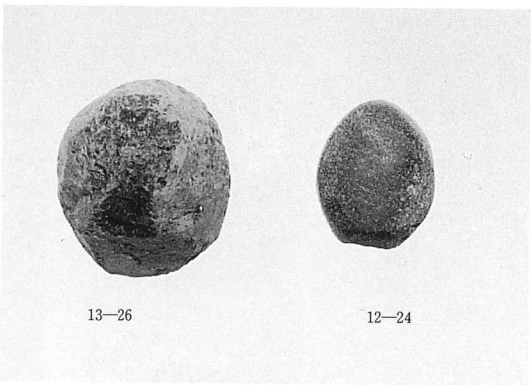
Ｊ２号住居址出土石器　（１：３）



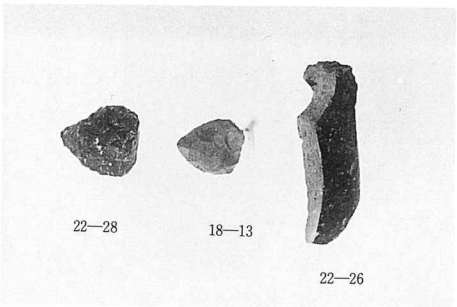
Ｊ２号住居址出土石器
（１：３）



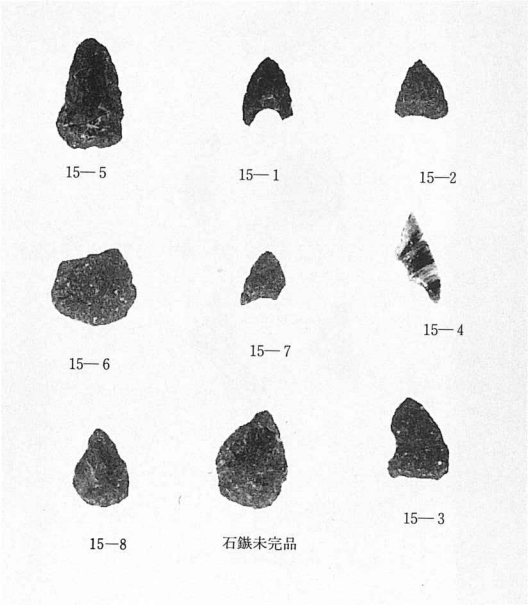
Ｊ２号住居址出土石器　（１：２）



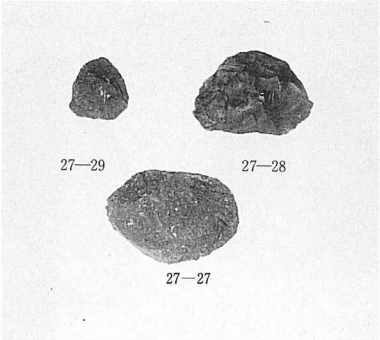
Ｊ２号住居址出土石器　（１：３）



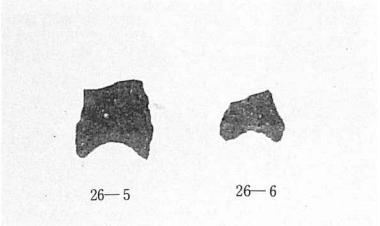
Ｊ３号住居址出土石器　（１：３）



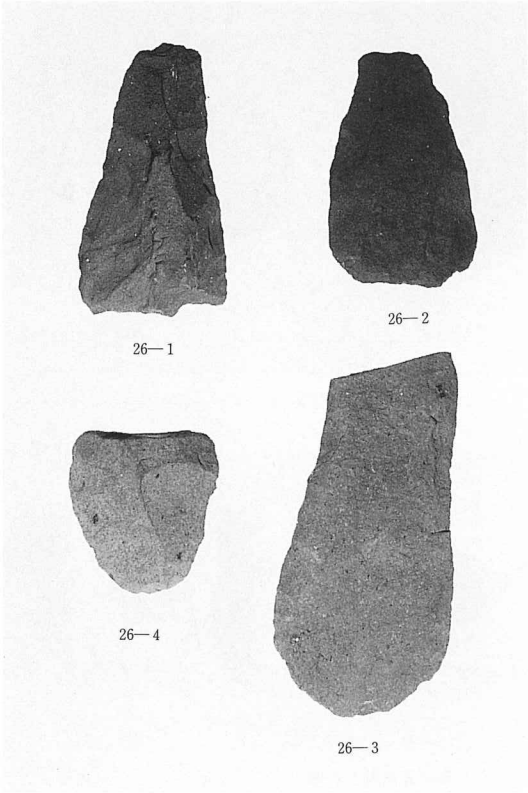
Ｊ３号住居址出土石器　（１：２）



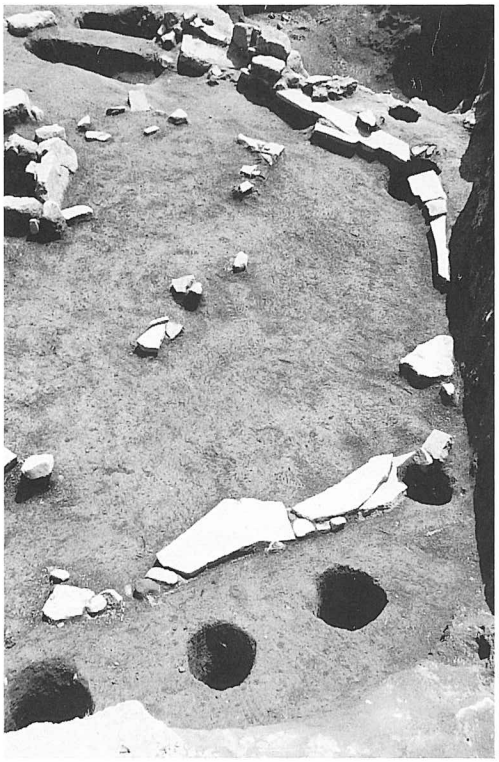
Ｊ４号住居址出土石器　（１：３）



Ｊ４号住居址出土石器　（１：２）



Ｊ４号住居址出土石器　（１：３）



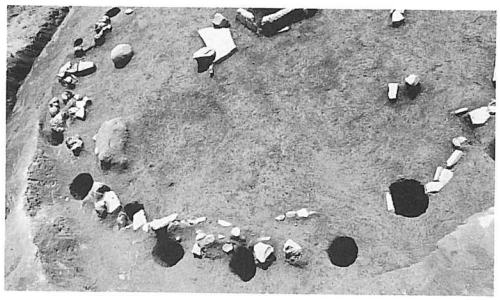
Ｊ２号住居址西側　北より

第８号トレンチ　北より

第９号トレンチ　北より

第３号トレンチ　東より

トレンチ掘下状況　北より



Ｊ２号住居址東部　北より

Ｊ２号住居址南側　北より

鶉ヲネ遺跡近景　南より

調査風景

整理風景

調査区埋戻風景

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第21集
長野県佐久市

鶉　ヲ　ネ　遺　跡

1990年３月
編集者　佐久埋蔵文化財調査センター
発行者　長野県佐久市教育委員会
印刷所　信毎書籍印刷株式会社